## 1. はじめに

位置と環境

松野遺跡は、長田区松野通で昭和56年に発見された遺跡です

今回の調査は、前回の調査地からJR線を挟んだ南側の長田区日吉町2丁目で実施しています。

遺跡は、六甲山系から流れだした妙法寺川や苅藻川などの河川によって形成された、扇状地性低地の中の南北方向の微高地上に立地しており、現標高は約7mです。

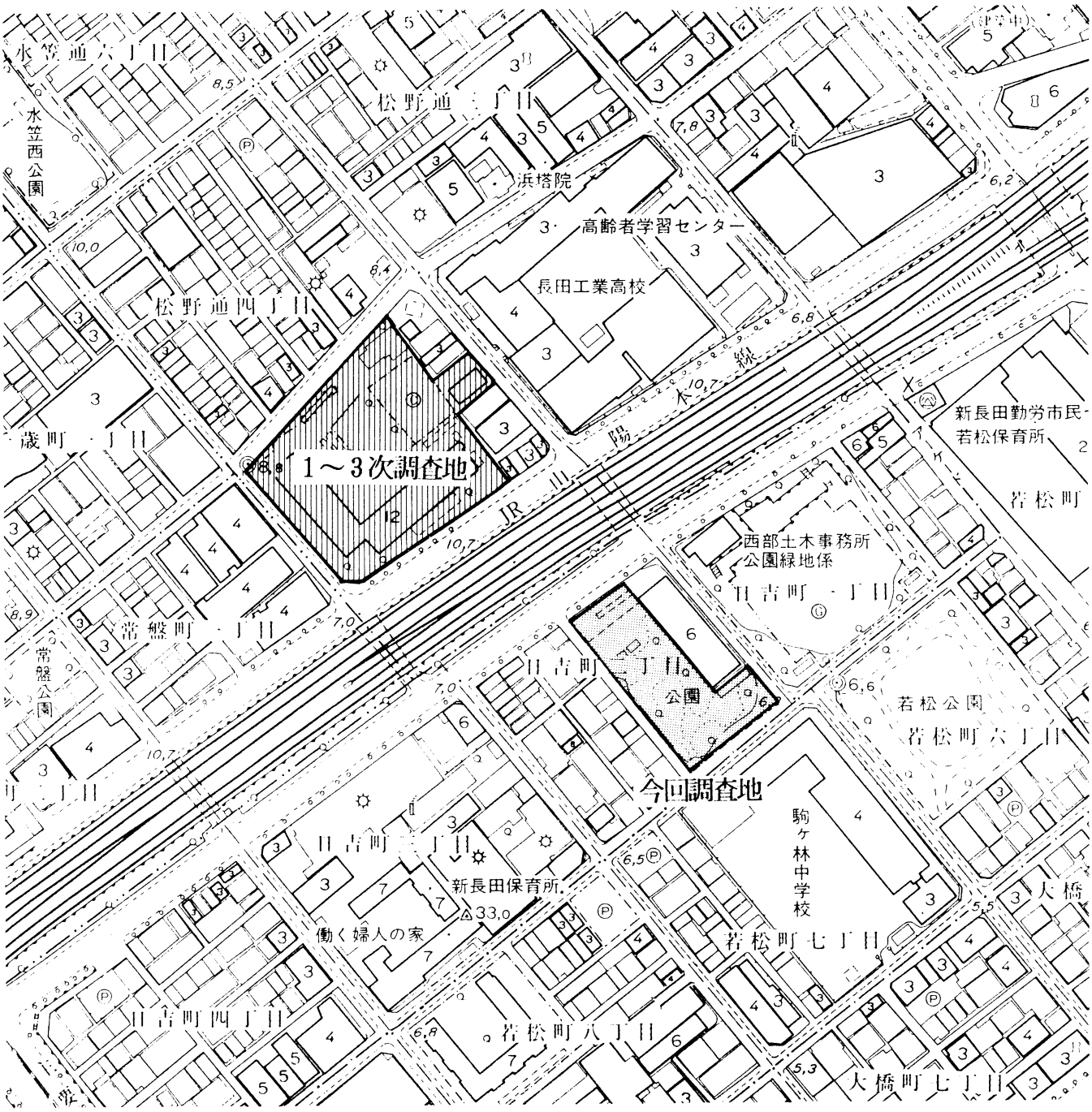



図1　調査地位置図

## 周辺の遺跡

松野遺跡の周辺には、多くの遺跡が知られています。

旧石器時代の遺跡は不明確ですが、縄文時代中期になると名倉遺跡が知られるようになり、晩期には長田神社境内遺跡や五番町遺跡が現れます。そして、弥生時代に入ると遺跡数は増加し、前期には上沢遺跡や戎町遺跡が展開し、戎町遺跡はこの地の拠点的な大集落として古墳時代まで継続します。後期には長田神社境内遺跡や神楽遺跡が集落規模を拡大します。

古墳時代では、松野遺跡第1次調査で中期末の豪族の居館が発見され注目されました。他に、神楽遺跡・鷹取町遺跡・大田町遺跡がほぼ同時期に営まれ、海岸近くには念仏山古墳（全長約180mの前方後円墳）のような古墳も作られました。そして、丘陵上には古墳時代後期の須恵器の窯跡（林山窯跡）も作られるようになります。

奈良時代以降になると、長田野田遺跡や八部郡衙（古代の役所）の推定地の神楽遺跡、古代山陽道須磨駅の可能性の高まった大田町遺跡が調査されています。また、平安時代末から鎌倉時代にかけては、二葉町遺跡や長田神社境内遺跡で集落が確認されています。

## 調査に至る経過

平成7年1月17日の阪神・淡路大震災で、長田区をはじめとして神戸市内は大きな被害を受けました。

そのため、震災後この調査地周辺は新長田駅南地区の市街地再開発事業区域に指定されました。そこで、再開発事業に伴う住宅建設に先立ち、平成8年7月から発掘調査を実施しています。

今回の調査は、約2300㎡を3地区（1区・2区については調査終了）に分割して実施し、今回現地説明会を行うのは3区（約1400㎡）です。

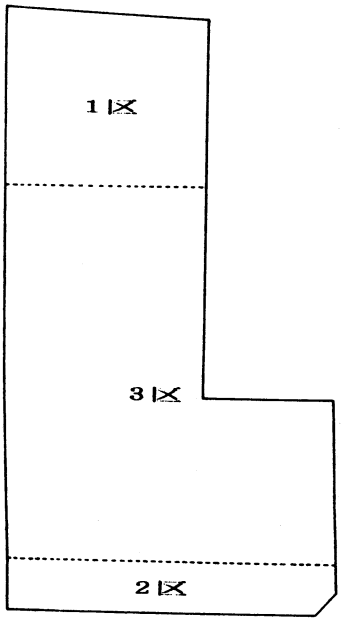
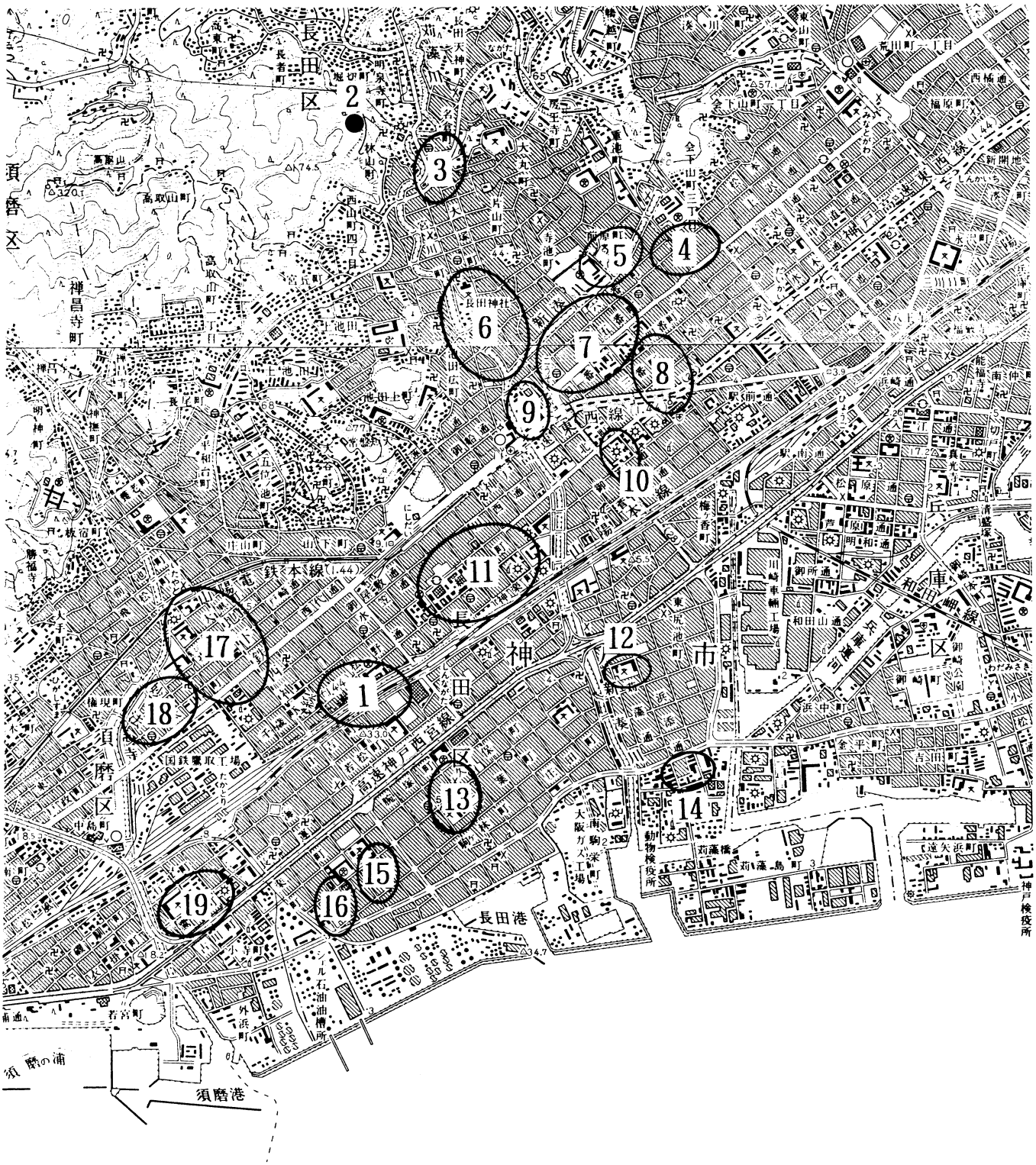



図2　調査区地区割図




1，松野遺跡　2，林山窯跡　3，名倉遺跡　4，上沢遺跡
5，室内遺跡　6，長田神社境内遺跡　7，五番町遺跡
8，三番町遺跡　9，長田南遺跡　10，御蔵遺跡　11，神楽遺跡
12，苅藻遺跡　13，二葉町遺跡　14，念仏山古墳　15，長田野田遺跡
16，長田本庄町遺跡　17，戎町遺跡　18，大田町遺跡　19，鷹取町遺跡

図3　周辺の主要遺跡

## 2. 調査の概要

松野遺跡は第1～3次調査で、弥生時代後期（今から約1700年前）の集落と古墳時代中期末（今から約1500年前）の豪族居館が調査されました。この古墳時代の豪族居館は柵列（さくれつ）で区画された中に、掘立柱建物が配置されたもので、その全容がほぼ明らかとされた近畿地方では数少ない遺跡です。

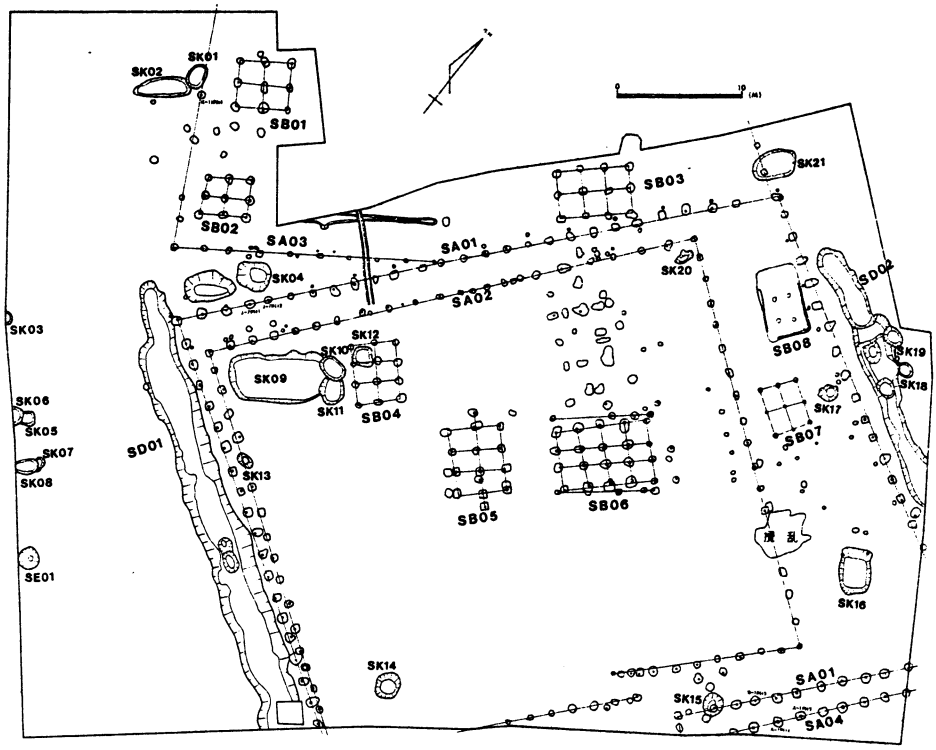



図4　松野遺跡第1次調査（豪族居館）平面図

今回の調査では、弥生時代の遺物は出土していますが、遺構は確認されませんでした。古墳時代では竪穴住居（たてあなじゅうきょ）3棟、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）11棟、井戸状遺構1基、区画溝1条、土坑（どこう）・溝・ピットなど多数あります。また、今回新たに鎌倉時代（今から約600年前）の掘立柱建物2棟、井戸3基、土坑・溝・ピットなども見つかり、中世の集落もこの周辺に拡がっていることがわかりました。

鎌倉時代　掘立柱建物　今回初めて確認された時代のものですが、掘立柱建物は2棟見つかっています。

井戸　井戸は3基で、いずれも直径1.3m前後を測る不整円形の掘形（ほりかた）を持つものです。井戸枠の遺存していたものには、底に水だめ用の曲物（まげもの）が2段据えられていました。この中からは、須恵器の椀（わん）などが出土しています。

古　墳　時　代　　古墳時代の竪穴住居３棟、掘立柱建物は11棟、井戸状遺構１基、土坑・溝・ピット多数が確認されています。

竪穴住居　　１区でのみ確認されたものです。後世の削平や現代の攪乱のために遺存状態は良くありませんが、いずれも一辺４ｍ程度の方形の住居です。時期は古墳時代中期末から後期初頭にかけてのものと考えられます。

掘立柱建物　　１区に１棟、２区に１棟、今回の調査区で９棟が新たに確認されています。掘立柱建物は、地面に掘られた穴に直接柱を立てて造られた建物です。柱を据えるために掘られた穴の直径は小さいもので20cm、大きいもので80cm程度あります。柱と柱の間は1.1～2.0mあります。掘立柱建物には住居に使用されたものと、倉庫に使用されたものの２種類がありますが、一般的に側柱構造のものが住居用で、総柱構造のものが倉庫ではないかといわれています。

掘立柱建物の時期は、出土遺物が少なく、その時期を決めがたいですが、わずかに出土している遺物から、竪穴住居とほぼ同時期の中期末から後期初頭のものと考えられます。また、一部に建物の重複するところや、柱通りの方向が異なるものが認められることから、２時期あるいは３時期の時間幅があるようです。

区画溝　　３区の中央よりやや北でほぼ北東から南西方向に検出された溝です。溝１は、約26m分が確認され、幅は最大１ｍ、深さ30cmです。この溝からは、中期末から後期初頭の完形品の須恵器や土師器が出土しています。また、これらの土器に伴って滑石製双孔円盤・剣形石製品・臼玉が出土しており、当時何らかの祭祀をここで行っていたものと考えられます。

井戸状遺構　　３区の南端で検出された、直径約５ｍの円形の遺構です。深さは約２ｍあります。井戸枠などは確認できませんでしたが、最下層からは木製品が数点出土しています。また、滑石製の剣形石製品が１点出土しています。

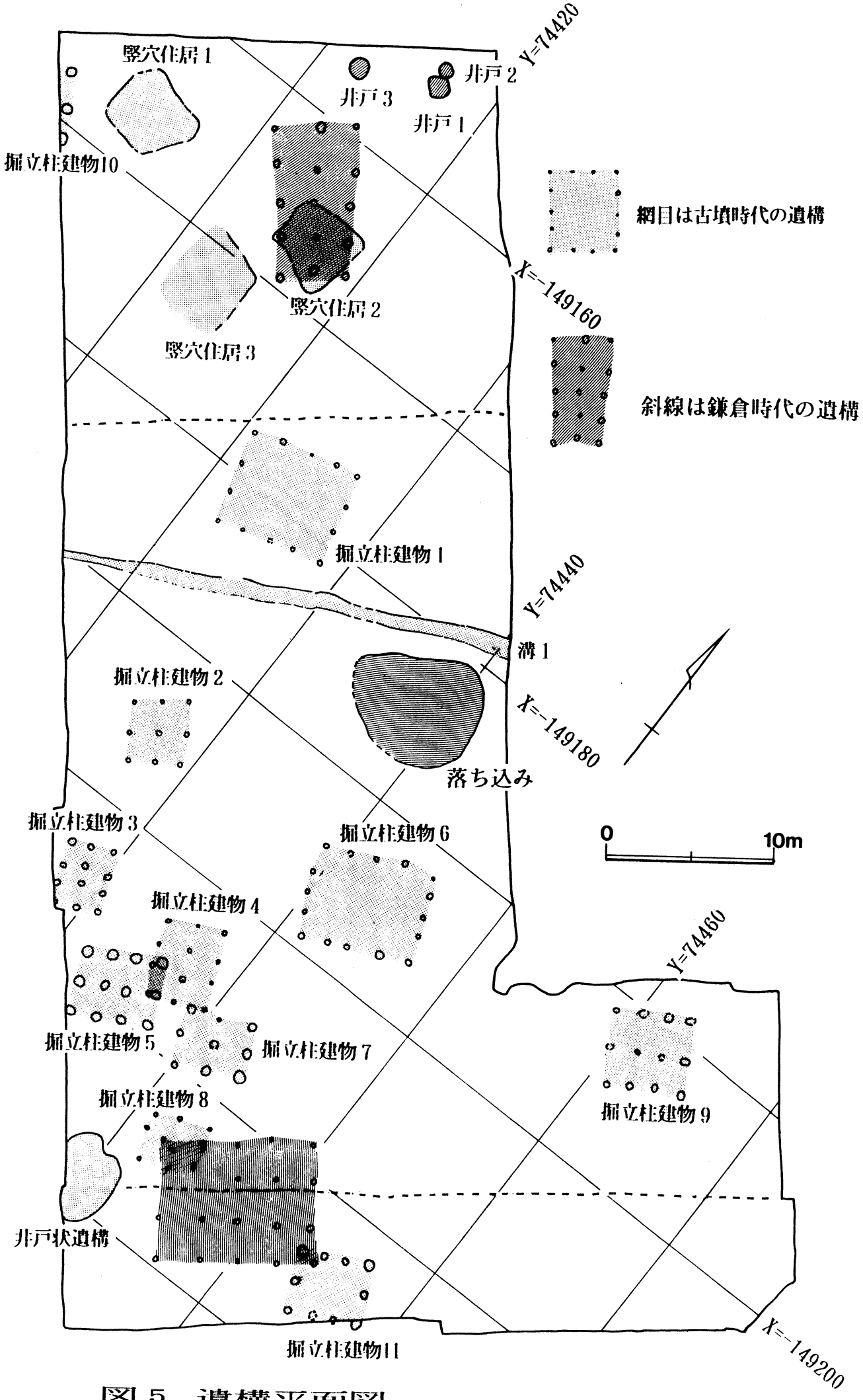

竪穴住居1
井戸3
井戸2
井戸1
Y=74420
掘立柱建物10
網目は古墳時代の遺構
X=-149160
竪穴住居2
竪穴住居3
斜線は鎌倉時代の遺構
掘立柱建物1
Y=74440
溝1
掘立柱建物2
X=-149180
落ち込み
掘立柱建物3
掘立柱建物6
0
10m
掘立柱建物4
Y=74460
掘立柱建物5
掘立柱建物7
掘立柱建物8
掘立柱建物9
井戸状遺構
掘立柱建物11
X=-149200

図5　遺構平面図

| | 規模（桁行×梁間）（m） | 面積（㎡） | 柱構造 | |
|---|---|---|---|---|
| 掘立柱建物1 | 3間(5.6) × 4間(6.3) | 35.3 | 側　柱 | |
| 掘立柱建物2 | 2間(2.6) × 3間(3.7) | 9.7 | 総　柱 | |
| 掘立柱建物3 | 2間(3.9) × 3間(4.5) | 17.6 | 総　柱 | |
| 掘立柱建物4 | 2間(3.6) × 3間(4.5) | 16.2 | 総　柱 | |
| 掘立柱建物5 | 2間(3.2) × 2間(4.0) | 12.8 | 総　柱 | |
| 掘立柱建物6 | 4間(5.6) × 4間(6.4) | 35.8 | 側　柱 | |
| 掘立柱建物7 | 2間(4.7) × 4間(4.5) | 21.2 | 総　柱 | |
| 掘立柱建物8 | 2間(2.3) × 2間(3.4) | 7.8 | 側　柱 | |
| 掘立柱建物9 | 2間(3.0) × 2間(4.0) | 12.0 | 総　柱 | |
| 掘立柱建物10 | 2間(4.0) × ——— | —— | —— | |
| 掘立柱建物11 | 2間(3.5) × 3間(4.2) | 14.7 | 側　柱 | |
| 掘立柱建物12 | 2間(5.0) × 4間(8.5) | 42.5 | 総　柱 | (中世) |
| 掘立柱建物13 | 3間(6.2) × 4間(9.2) | 57.0 | 総　柱 | (中世) |

| | 規模（m） | 面積（㎡） |
|---|---|---|
| 竪穴住居1 | 4.4×4.4 | 19.4 |
| 竪穴住居2 | 4.8×2.2 以上 | ——— |
| 竪穴住居3 | 4.0×4.2 | 16.8 |

松野遺跡建物一覧表

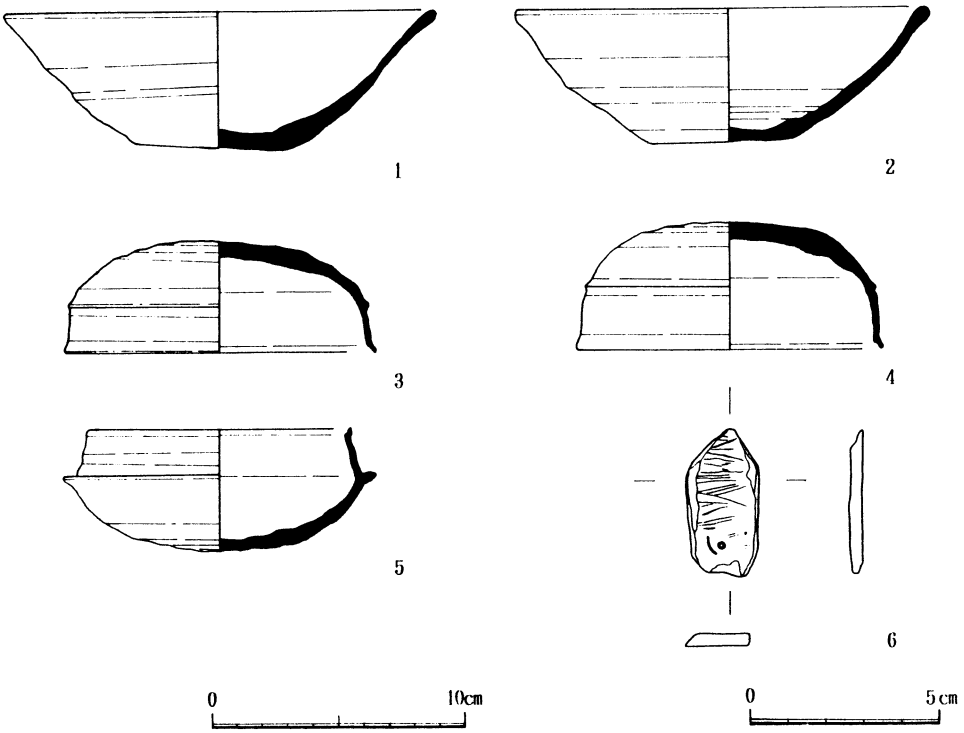



図6　出土遺物実測図

1，2　須恵器椀（鎌倉時代）
3，4　須恵器坏蓋（古墳時代）
5，　須恵器坏身（古墳時代）
6，　滑石製剣形石製品（古墳時代）

## 3. まとめ

現在調査は継続中で、最終的な結論を述べることはできませんが、これまでにわかったことをまとめてみます。

①松野遺跡では、第1次調査で豪族の居館が発見されましたが、その時には周囲に集落などは確認できませんでした。今回、調査された建物群は、住居に比べて倉庫が多く豪族に比較的近い関係にあった人々の集落ではないかと考えられます。

②調査区の中央で確認された溝から北側には、竪穴住居が比較的まとまって3棟確認されていますが、この溝より南側については竪穴住居は確認されませんでした。このことからこの溝は、集落の内部を、区画するための溝として機能していたものと推定されます。古墳時代の祭祀関係遺物である滑石製品もこの溝から多く出土していることとも、関連があると考えられます。

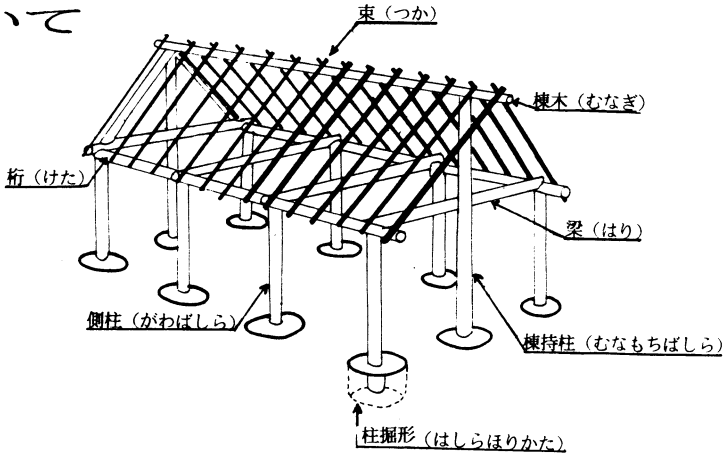
③掘立柱建物は11棟検出されましたが、この建物群は、建物の方向や重複関係から2～3時期の時間幅が考えられます。その中で、側柱構造の掘立柱建物2棟が比較的規模の大きな建物で、住居であった可能性が高いといえます。その他の建物は2間×3間程度の小規模の総柱建物が多く、倉庫であったと考えられます。

今回の調査については、神戸市文化財専門委員（立命館大学教授）和田晴吾先生の御指導をいただきました。

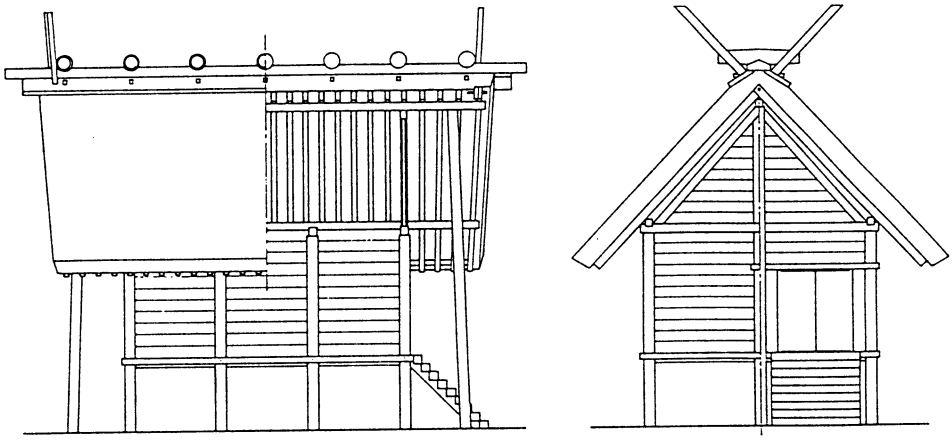
また、都市計画局新長田南再開発事務所の協力を得ています。

## 〔参考〕 掘立柱建物について

掘立柱建物とは、地面を円形あるいは方形に掘りくぼめて、その中に柱を据えて建物を建てる構造のものです。

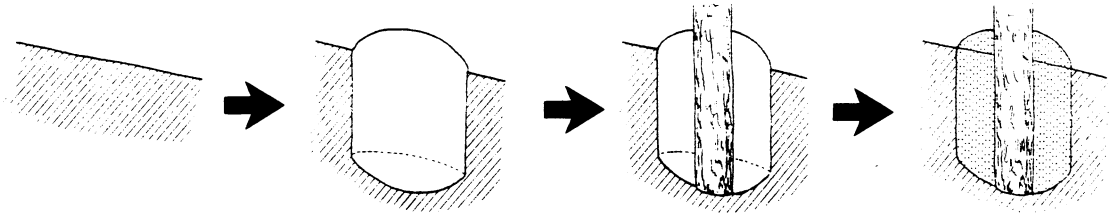



集英社『日本古代史５』
豊饒の大地を一部改変



松野遺跡豪族居館復元図
（宮本長二郎氏復元図）

## 図７　柱穴が掘られてから調査されるまで



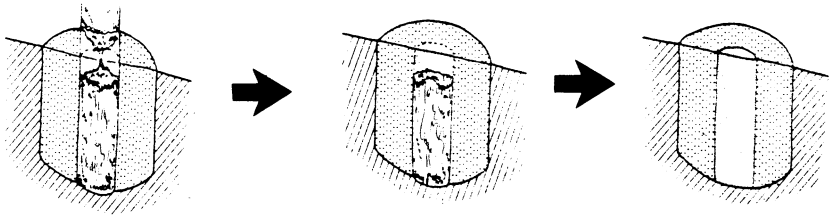
①柱を掘る前

②柱を入れるために柱よりも大きめの穴を掘ります（掘形）

③柱を据えます

④柱のまわりを埋めます
これで柱の据え付けは完了です

何年かたつと



⑤地面付近の柱がいたんでくることがあります

⑥補修されずに建物が放棄されると地面の中の柱のみが残されます

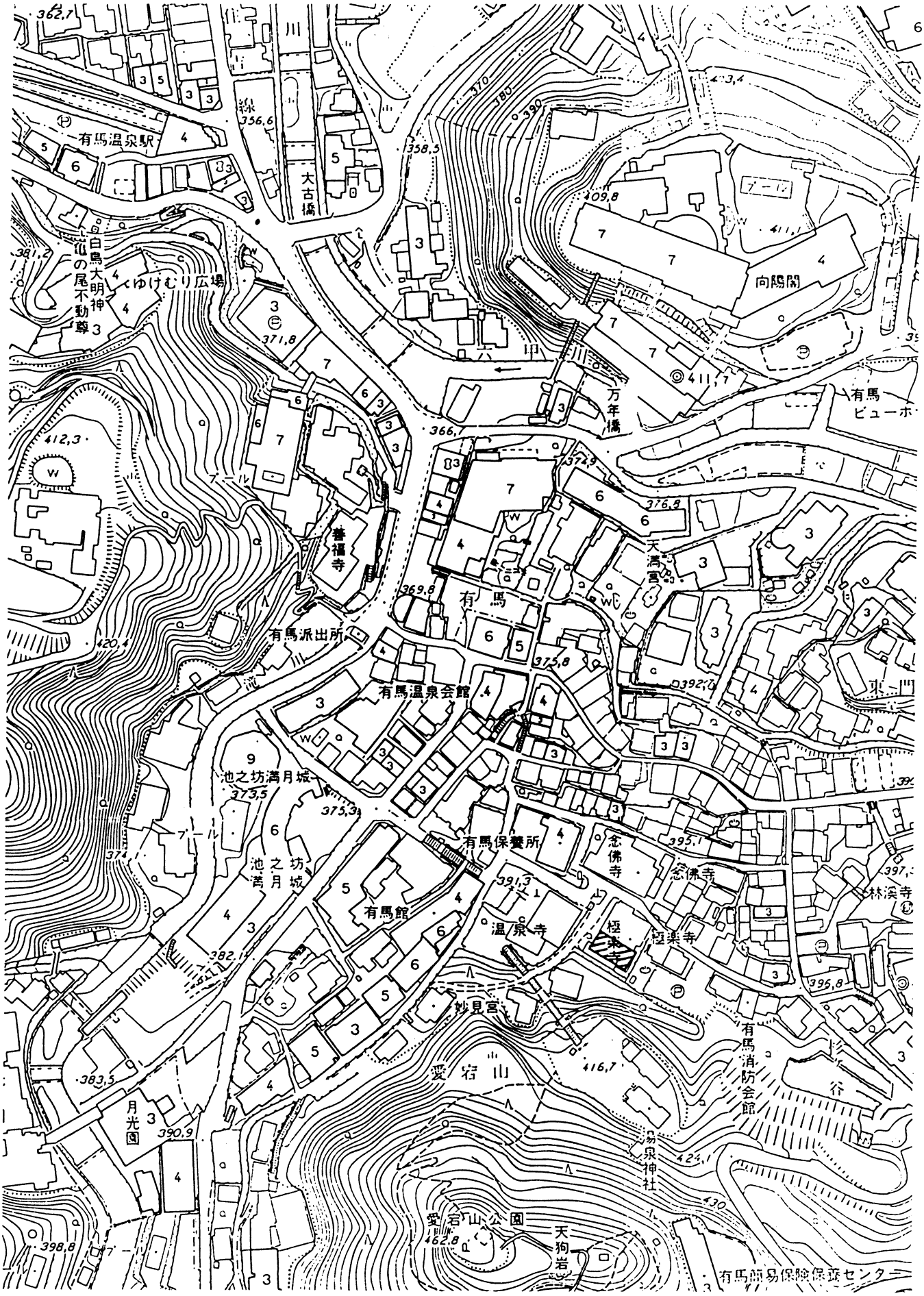
⑦状態が良いと柱材が残ることもありますが、多くの場合材は朽ちて土に置き換えられていきます

⑦になったものを地面を削って探していきます

# 有馬極楽寺（伝豊太閤湯殿あと）

## 現地説明会資料

平成９年３月１６日
神戸市教育委員会




遺跡の位置（１／２５００）



2

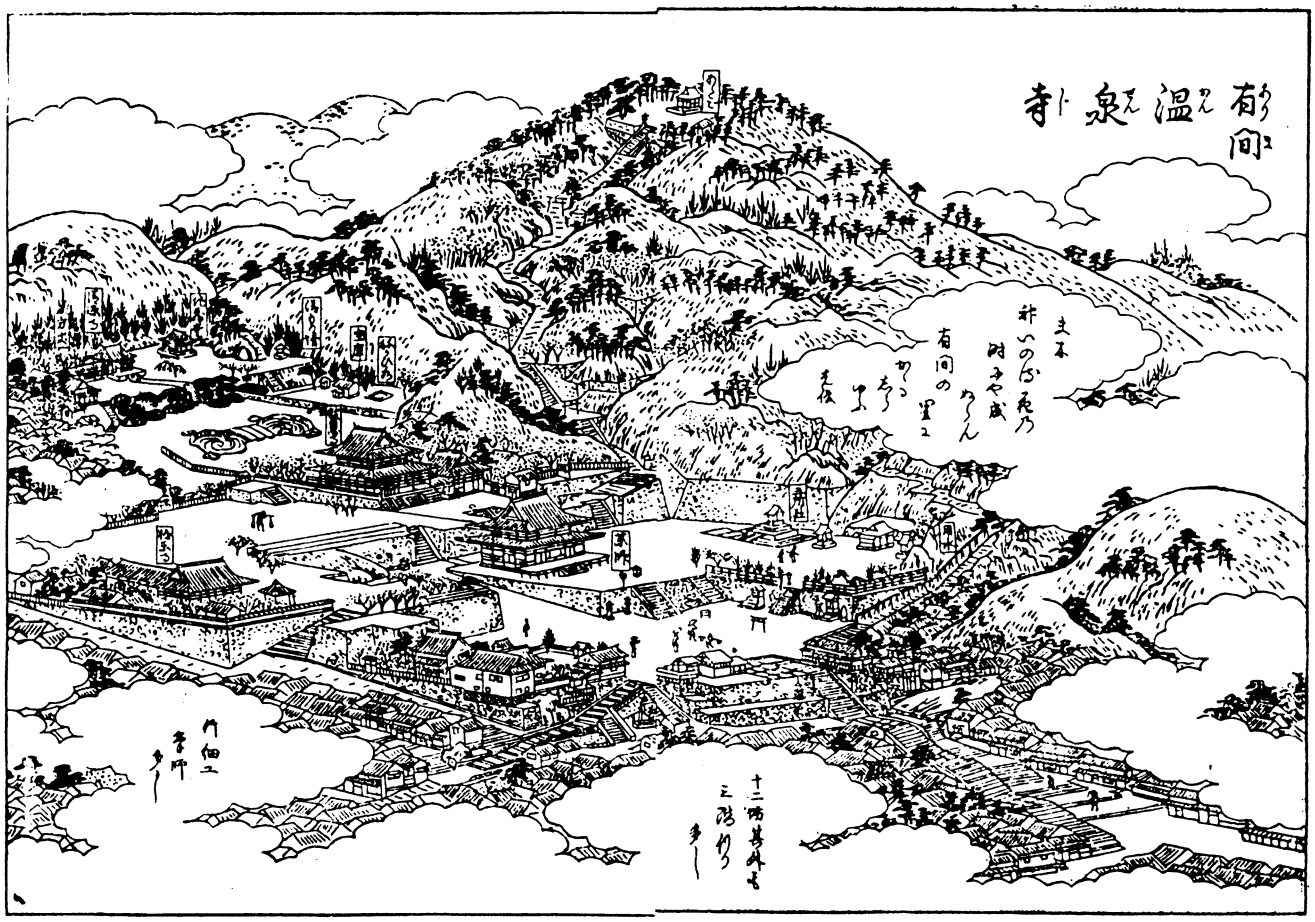
はじめに

北区有馬町極楽寺にあり、豊臣秀吉の湯殿跡として伝えられてきた石組みの遺構およびその周辺についてこのたび神戸市教育委員会が発掘調査をおこないました。現在までの調査によって、秀吉のころの陶磁器などが出土し、石組み遺構のなかでは、湯ぶねの一部ではないかと思われる遺構が検出されました。また、江戸時代の火災あとも確認され、極楽寺の歴史の一部が具体的な考古学資料として明らかになりました。

有馬温泉はかつての都である奈良・京都から一番近い湯治場として都からも多くの人々が訪れています。古く飛鳥時代には舒明天皇・孝徳天皇が訪れています。孝徳天皇の皇子はここで生を授かったことによって有間皇子と名付けられました。

このように古い歴史をもつ有馬ですが、考古学的にはほとんどその歴史がわかっていません。今回の発掘がこの地で行われるはじめての考古学的調査となります。

先年の阪神・淡路大震災によって有馬でも多くの文化財が被害を受けましたが、ここ極楽寺も本堂および庫裡が傾いてしまいました。本堂はジャッキアップ工法で復元することができましたが、庫裡の建物はかなわず、これを解体し、古い部材も利用して再建を行うことになりました。「太閤の湯殿あと」は、これまで庫裡の床下にあったため、簡単にみることができませんでしたが、今回の建て替えのため、二百年ぶりに露天となり、これを機会に発掘調査が行われることになったわけです。その結果、秀吉の湯屋あとと推定される遺構が検出され、その後の極楽寺の建物の変遷等を知る遺構・遺物も確認されました。現在調査は途中であり、今後も新たな発見があるとおもいますが、本日はこれまでの調査成果をみなさまにご覧いただき、四百年前にあった秀吉の有馬御殿に思いを馳せていただきたく思います。



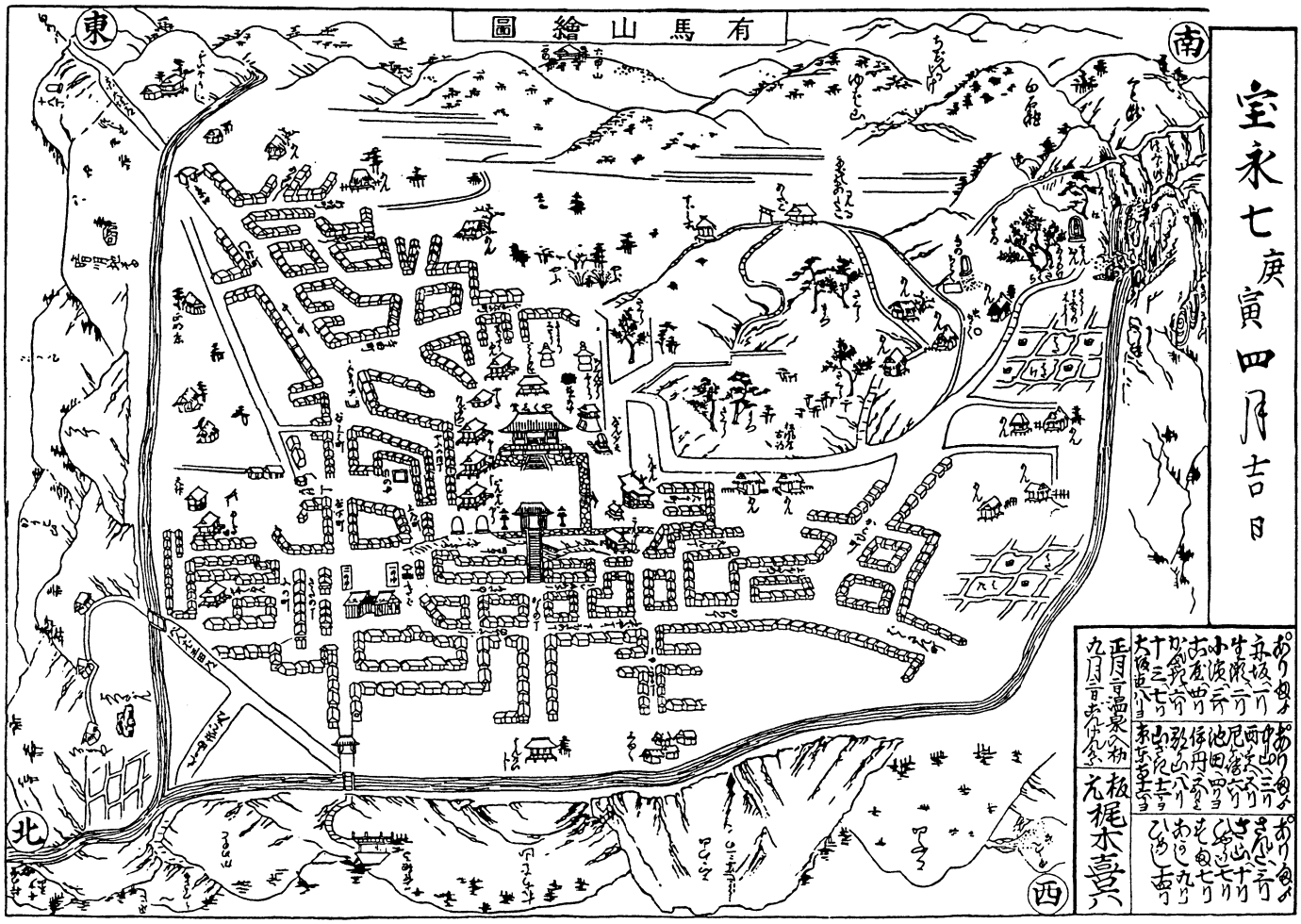

『摂津名所図会』寛政8年(1794)

秀吉と有馬

豊臣秀吉がたびたび有馬湯山を訪れたことはよく知られていますが、秀吉が有馬とかかわる最古の記録は、天正七年(1579)のものです。3月10日に織田信長を迎えるため、有馬郡山口荘（現在西宮市）の人々を道路普請に徴用しています。4月5日には湯山阿弥陀堂の寺領を安堵しており、このころには有馬の地が秀吉の支配下にあったことがわかります。

秀吉が有馬湯山を湯治のために訪れたのが公式な文書の上で確認できるのは都合九回あり、その最初が天正11年(1583)で、最後が文禄3年(1594)です。ただし、天正八年三木城攻めに勝利した秀吉は疲れを癒すために有馬を訪れ、ここで二日間眠りつづけたとする記事が『温泉寺古写記』にみえ、正式な記録に残っていない湯山訪問はこの9回以外にもあったと考えてよいでしょう。

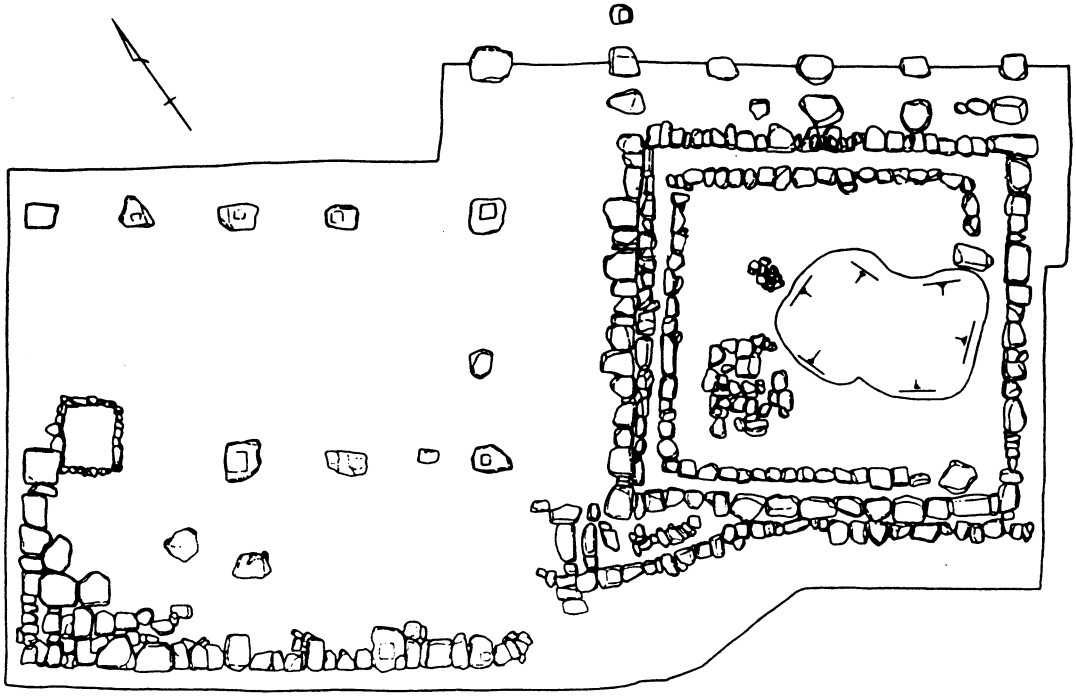
当初、秀吉は有馬滞在の宿舎として、現在、有馬天神社・明治生命寮『利休荘』の所在する地点にあった『阿弥陀寺』を利用していました。文禄三年(1594)になり、有馬の六十五軒の家を強制退去させ、自らの御殿を建設させています。ところがこの御殿はその二年後、今から401年前の慶長元年(1596)閏7月12日に起きた大地震で倒壊してしまいました。翌年、秀吉はこれを再建させましたが、この地震にともなって新たな地点で温泉が涌き出、秀吉はそこにも新たな湯屋と馬屋などを造らせています。この泉源は秀吉の死後間もなく湯の涌出は止まってしまいますが、その場所は『豊太閤願いの湯』あととして名所となっていたようで、宝永七年(1710)の『有馬山絵図』にも「○○のゆ」として記載されています。今回調査を行った地点はこの石組み遺構およびその周辺にあたります。




『有馬山絵図』宝永7年(1710)

発掘調査の概要

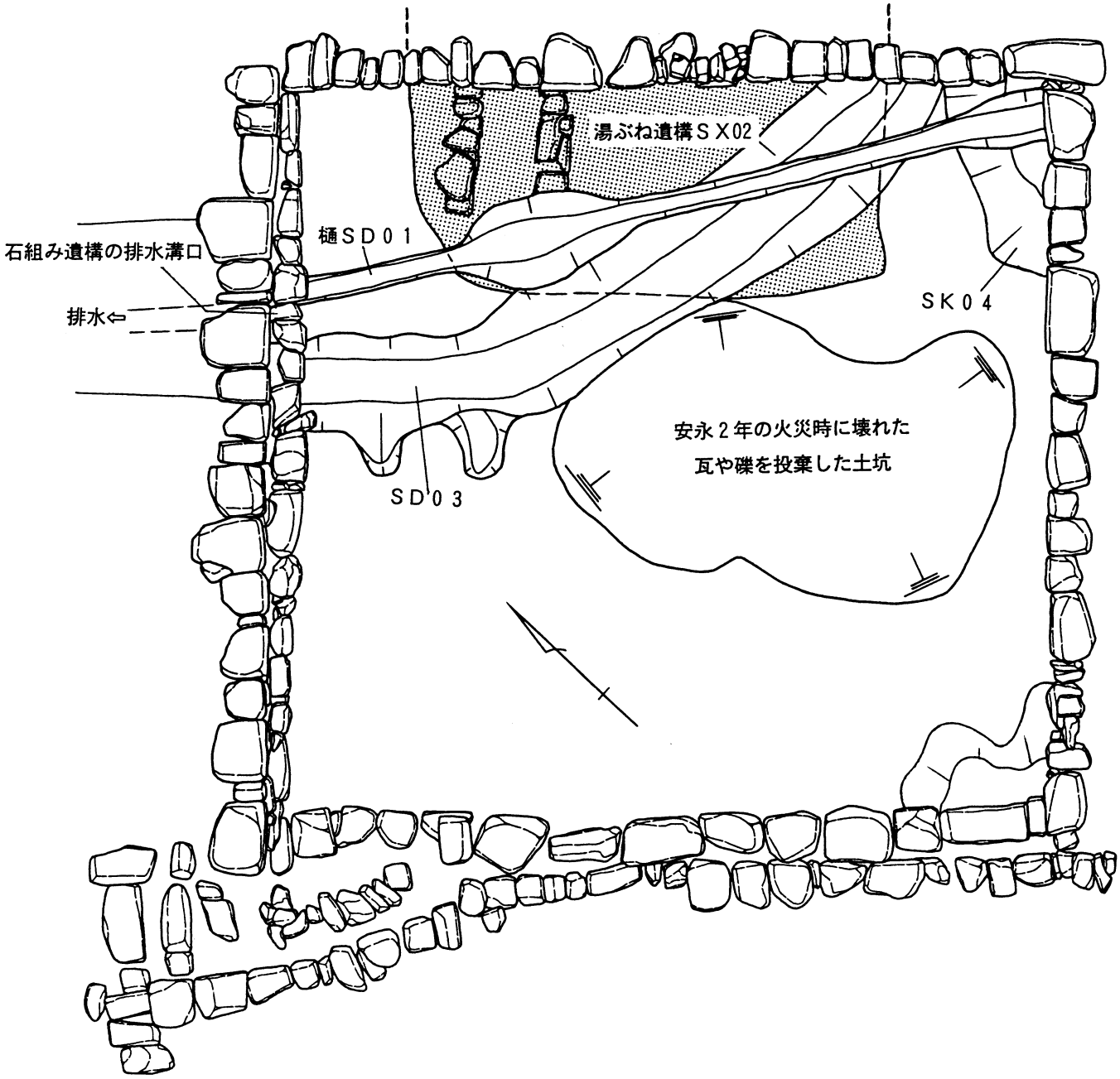
江戸時代の極楽寺　有馬極楽寺は江戸時代に二度火災に遭っています。一度めは元禄8年(1695)6月29日におきた大火、二度目は安永2年(1773)4月14日におきた大火によるものです。現在の有馬極楽寺の本堂は天明元年(1781)10月に上棟されたものです。本日ごらんいただいているのは元禄8年(1695)の罹災時の面です。極楽寺の敷地は現在広い平坦面となっていますが、元禄時代の石段が確認されたことにより、当時は温泉寺側の敷地が一段低くなっていて、石段をのぼって寺の建物に上がったことが判明しました。この面にも建物の礎石が残っています。また、火災時の炭や焼土に混じって当時の生活用品が多量に残されていました。食器類は同じ形、同じ模様の皿や茶碗がかたまって出土しています。セットの食器類が箱に入ったまま焼け落ちたものと推測されます。寛永通宝などの銅銭・錫杖・小物入れの引き出し把手・キセルなどの銅製品も多く出土しています。



天明元年(1781)再建庫裡礎石と伝豊太閤湯殿あと（S：1／150）

安土桃山時代の遺構　南部の「豊太閤の湯殿あと」と言われてきた石組みの内部で検出されています。土坑2、溝2、湯ぶね(?)1があり、北側部分の調査がすすめば検出される遺構はさらに増えると予想されます。

石組み遺構（SX01）　元禄時代の火災層を掘り込んで「豊太閤の湯殿あと」とよばれてきた石組み遺構がつくられていることが確認され、この遺構が江戸時代以降のものであることが確認されました。秀吉の活躍した安土桃山時代の湯ぶねと推定される遺構SX02がこの石組み遺構の下にのびていることもこの石組みが新しいものであることを示しています。ただし、この石組み遺構は入口部分だけをみても何回かのつくりかえがおこなわれていることが確認できました。また、全体の石材をみてもその積み方、加工の仕方、風化の状態などにも違いがみられ、この遺構が単一の時期の所産でないことを推測できます。一部は安土桃山時代までさかのぼる可能性があります。




石組み遺構ＳＸ01内の遺構（Ｓ：１／６０）

湯ぶね？（ＳＸ02）　水あるいはお湯をためるために黄色い粘土と石を使ってつくられた平面方形の施設で、入浴のための湯ぶねである可能性が高い遺構です。溝（ＳＤ03）などによって壊されたり、石組み遺構ＳＸ01がその上に築かれたりしていて全体の形状や規模などについては不明な点が多くありますが、現在までの調査結果からは以下のような構造だろうと推測されます。

①湯ぶね自体は据え置き式のものではなく掘り込み式である。

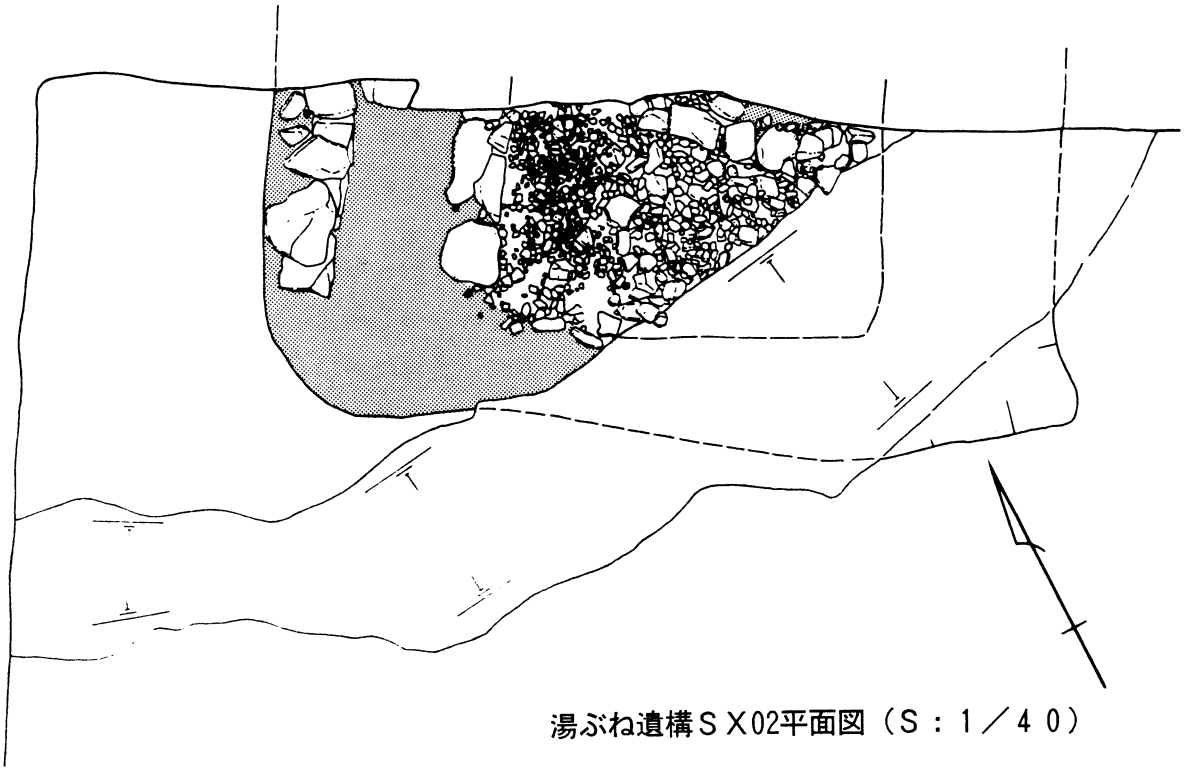
②平面プランは方形を呈するものと思われる。一辺は約２ｍであると推定されるが、他の一辺が同じ規模で正方形に近くなるのか、より長くあるいはより短くなり長方形となるのかは判断する材料がない。いずれにせよ一人あるいは二人用の湯ぶねであろう。

③湯ぶねの深さは現状で35cmがある。後の削平を受けていると当然考えられるので、本来はもう少し深さがあったものと推測される。ただし、深いものではなかったろう。

④湯ぶねのぐるりは「回」状に二重の石垣を巡らしその間に漏水どめの黄色い粘土を詰めて枠としている。

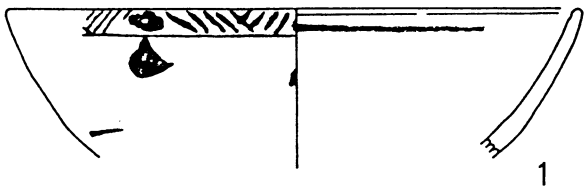
⑤湯ぶねの底にも小石および瓦片を混ぜた黄色い粘土を上面が平らになるように貼り、漏水どめとする。さらにその上に偏平な石を敷きつめる。この面が湯ぶねの底面となるようだ。

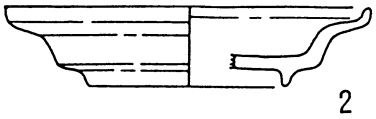
⑥給湯や排水の施設を推測させる遺構は確認できていない。

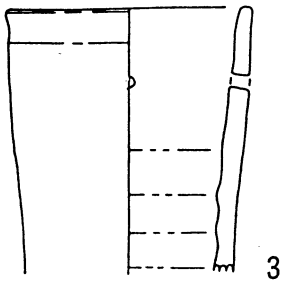


湯ぶね遺構ＳＸ02平面図（Ｓ：１／４０）

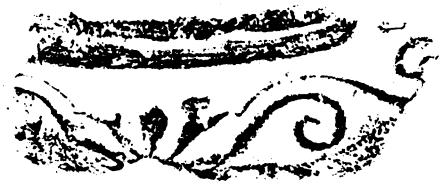
樋（ＳＤ01）　湯ぶね（ＳＸ01）がその機能を失って以降に溝が掘削されています。そのなかには幅約20cmほどの断面方形の樋がおさめられていますが、この樋も湯を流していたようで、底に湯垢状の物質がたまっているのを確認できました。

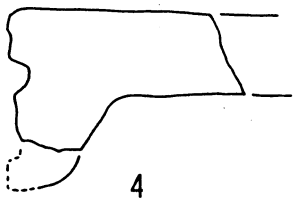


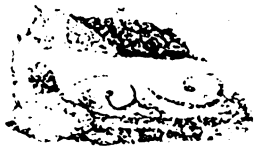


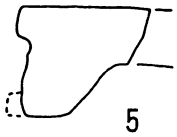




1　ベトナム産？　染付碗
2　中国南部産　染付小皿
3　備前　花器
4　軒平瓦
5　軒平瓦








出土遺物（S：1／2）

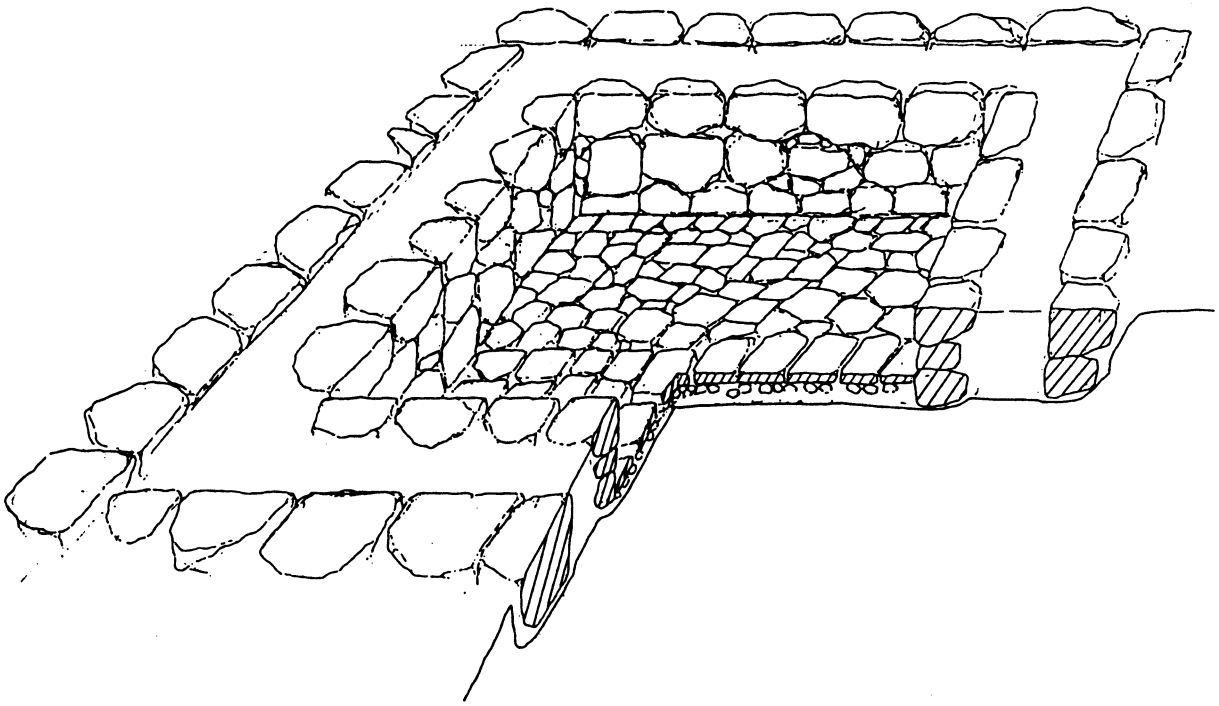
まとめ

銭湯に代表されるような江戸時代以降一般となるお湯につかるかたちの風呂、中世以前に一般的であった文字通り熱い風をうける蒸し風呂というように江戸時代以前と以降ではひとことで風呂とよぼれるものの内容に大きな違いがあります。安土桃山時代はちょうどその境の時期にあたりますが、この時期の風呂の実例がほとんど知られていない現状において太閤の湯ぶねと推定される遺構が確認されたことには、風呂あるいは入浴の歴史を考えていく上で大きな意義があると思われます。

また有馬は何回もの大火事をうけているため、ここに残された秀吉関係の遺物はほとんどありません。今回の調査で、安土桃山時代の茶碗をはじめ、茶器などが出土しており、実際秀吉が使ったものかは別として、そういった遺物が秀吉の御殿あとと考えられる遺跡から出土したことは歴史のロマンを感じさせます。

このほか、今回の調査で古墳時代や奈良時代の土器等も出土しており、今までほとんど知られることのなかった有馬の歴史の一端が明らかになったことも今回の調査の大きな成果と考えます。

今後の調査、また来年度におこなわれる次回の調査によってこの遺跡の様相はさらに鮮明になるものと思われます。



湯ぶねの構造イメージ図

| 回数 | 期　　間 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 1 | 天正11(1583) 8月17日～8月27日 | 3月　賤岳合戦 |
| 2 | 天正12(1584) 8月2日～8月8日 | 8月　大坂移城 |
| 3 | 天正13(1585) 1月22日～2月3日 | 7月　秀吉関白 |
| 4 | 天正13(1585) 9月14日～9月20日 | 8月　四国征服 |
| 5 | 天正18(1590) 9月25日～10月14日 | 7月　天下統一 |
| 6 | 天正19(1591) 8月17日～8月18日 | 2月　利休給死 |
| 7 | 文禄2(1593) 9月27日～閏9月7日 | 6月　対明講和 |
| 8 | 文禄3(1594) 4月29日～5月17日 | 2月　吉野花見 |
| 9 | 文禄3(1594)12月8日？～12月14日 | 8月　伏見城竣工 |

秀吉有馬入湯一覧（茨木一成氏による）

今回の発掘調査にあたっては極楽寺をはじめ瀬古尚志設計室・不動建設・有馬温泉観光協会・神戸市観光交流課の協力を得ています。また兼康保明氏・北垣聰一郎氏・黒田慶一氏・宮本佐知子氏・百瀬正恒氏・森島康雄氏・吉村正親氏をはじめとする多くの方々からご教示・ご指導をいただきました。

# 展示会・見学会資料

平成５年度

玉津南公民館

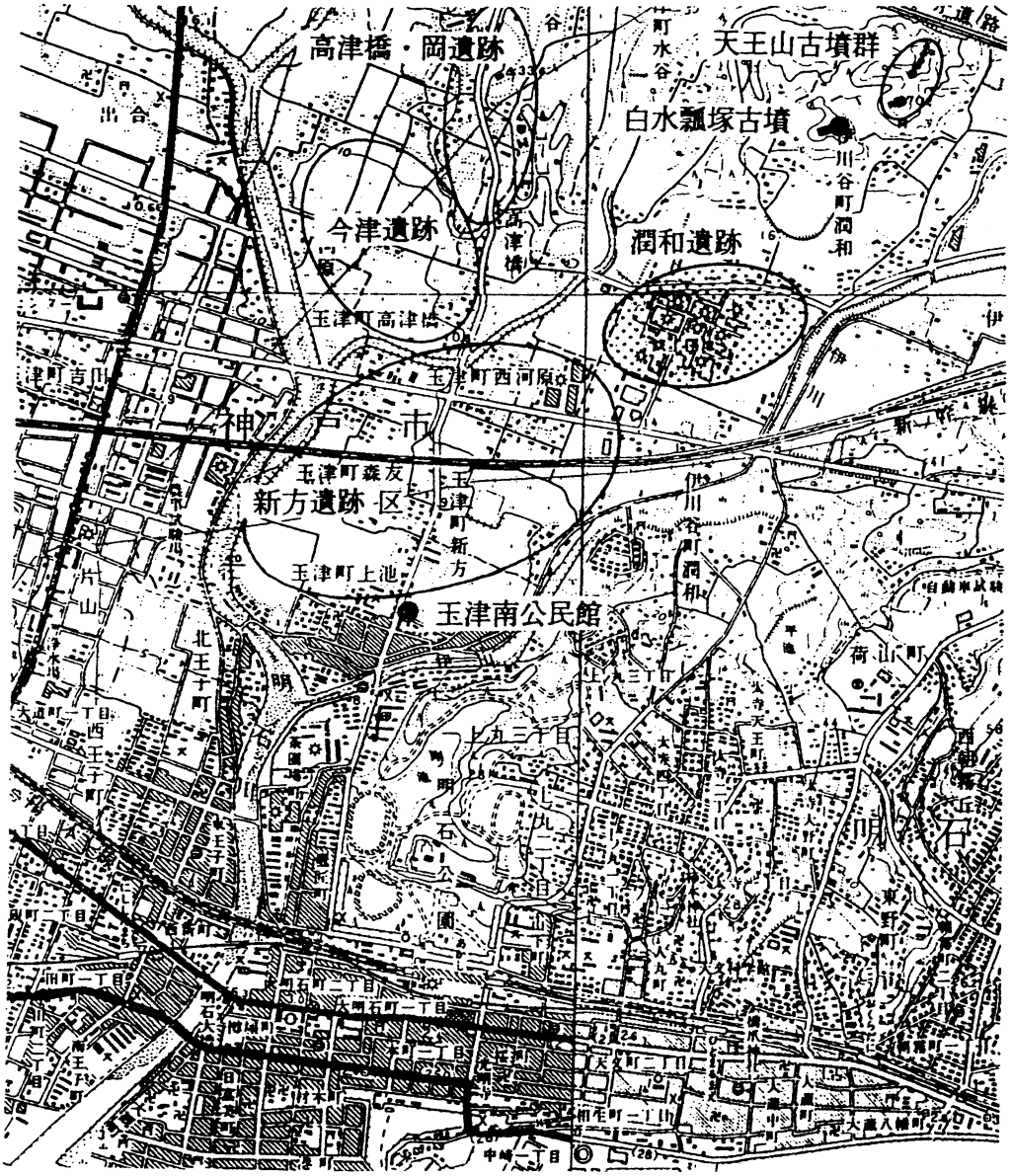
# 潤和遺跡と周辺の遺跡展

平成５年５月22日～５月27日
教育委員会文化財課

神戸市内では、毎年多くの遺跡で発掘調査が行われ、新しい貴重な成果がみつかっています。

今回の展示では、平成４年度に神戸市教育委員会が発掘調査を行いました伊川谷町の潤和遺跡からの出土資料を中心に、周辺の遺跡の資料もあわせて展示しています。

当時の人々の使った土器などを見ていただき、その当時の生活を想像していただければ幸いです。

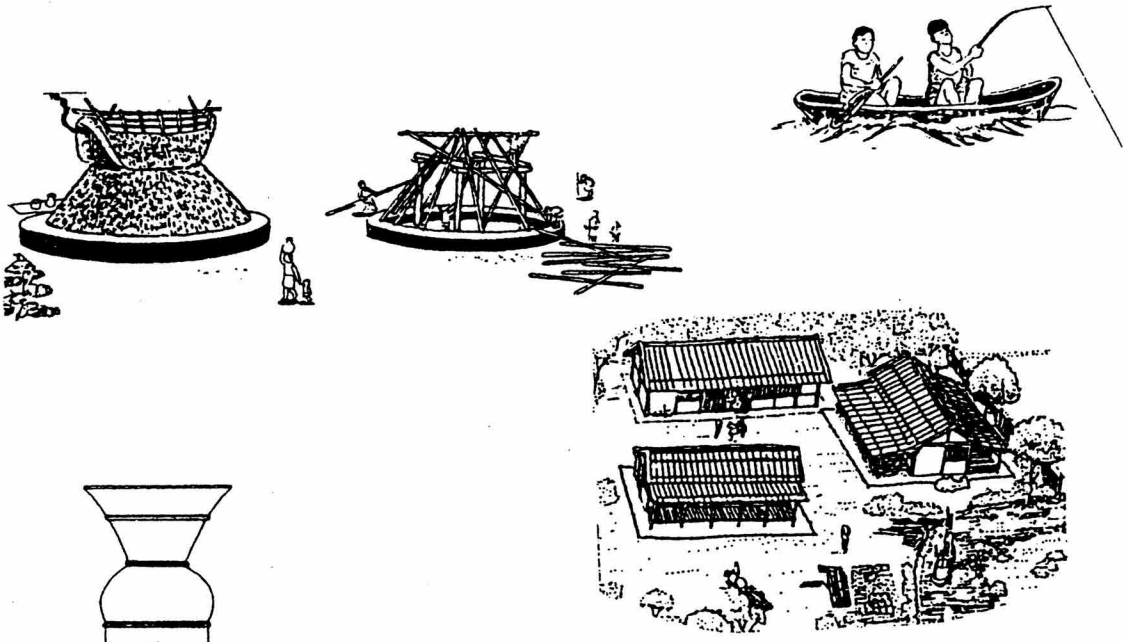


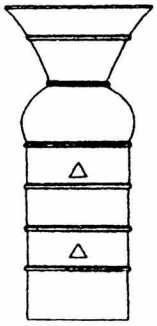
じゅんないせき
## 潤和遺跡の調査

潤和遺跡は西区伊川谷町にある遺跡で、平成４年度に行った調査では弥生時代後期（今から1800年前ごろ）の竪穴住居と平安時代後期（今から1000年前ごろ）の川が見つかりました。

弥生時代の家は直径約10mの円形で、弥生人が食事をしたり、寝起きする場所は六角形になっていたと考えられます。家の中央には直径１m、深さ60cmの炉の跡があります。床からは当時の人が使っていた土器がたくさん見つかっています。

平安時代の川は、幅が10m以上あったと考えられます。川の中からは捨てられた土器や焼けた石がたくさん見つかっています。

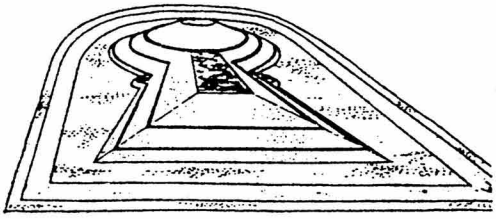




白水瓢塚古墳の
朝顔形円筒埴輪

しらみずひさごづかこふん
## 白水瓢塚古墳

伊川谷村の史跡として知られる古墳です。昭和62年度に初めて発掘調査を行い、全長57mの前方後円墳であることがわかりました。古墳の周囲には、埴輪を棺とした墓が多く見つかっています。玉津から伊川谷を支配していた有力な王様の墓と考えられます。



『地下に眠る神戸の歴史展Ⅸ』
埋蔵文化財センターにて　6/6(日) まで開催中

# 『第８回　長尾町埋蔵文化財展』

## ―― 最近の発掘調査成果より ――

平成５年11月１日～平成５年11月３日

神戸市教育委員会・㈶神戸市スポーツ教育公社

## １．はじめに

神戸市内では、百件近くの発掘調査が行われています。皆様がお住まいの北区内でも開発工事に伴う発掘調査が行われ、多くの貴重な成果が得られています。

今回の展示会では、長尾町、道場町、大沢町にかけて造成工事が行われている北神戸３団地内の古墳（お墓）から発見された品々をご覧いただきます。

## ２．長尾町周辺の遺跡

長尾町周辺では、古くは縄文時代後期（今から約4,000年前)頃から人が住みはじめたと考えられます。

宅原遺跡内垣地区でこの時代の土器が出土したり、善入川流域の龍ケ坪遺跡で、縄文時代の石鏃（石の矢じり）等の石器が見つかっています。

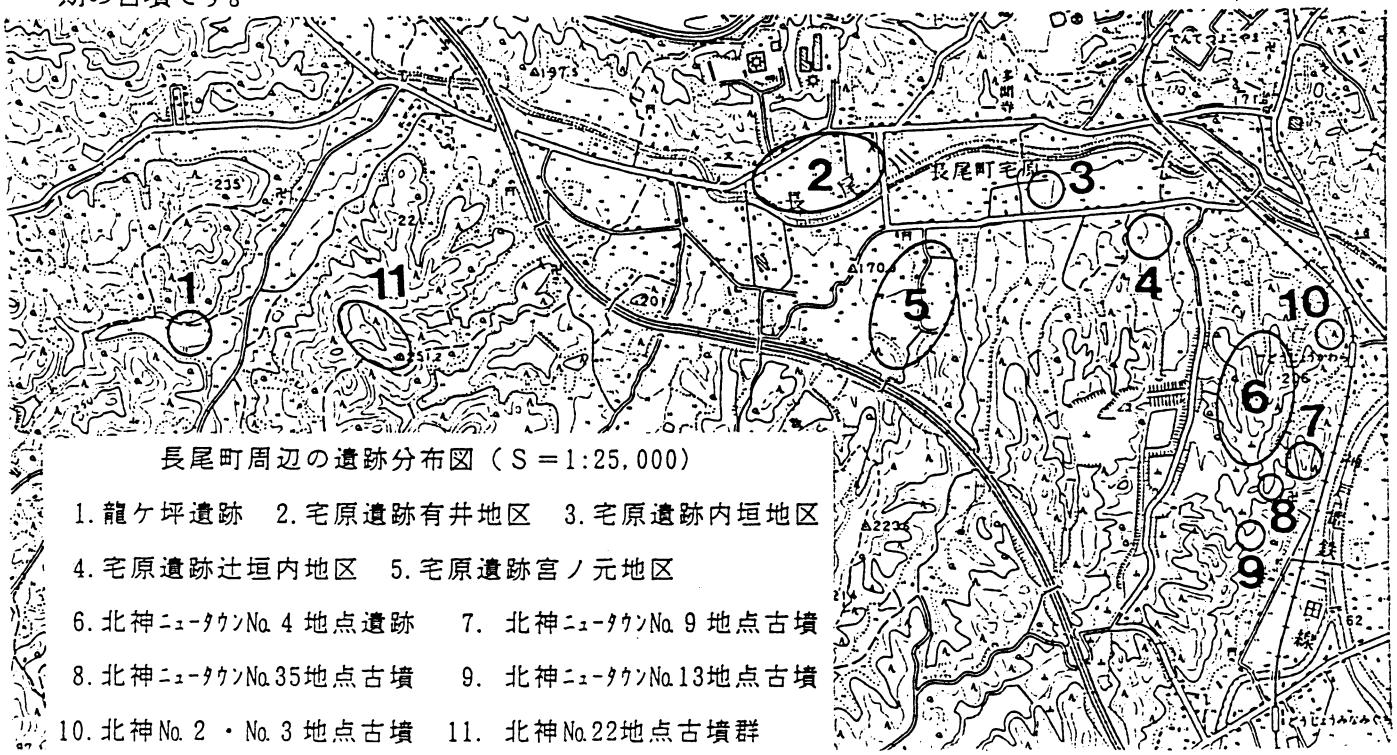
やがて、弥生時代になると、北神ニュータウン第４地点遺跡のように、丘陵上に集落が造られるようになり、宅原遺跡内垣地区でも、竪穴住居が造られ、人々が生活を営んでいました。

古墳時代になると、宅原遺跡有井地区・辻垣内地区・宮ノ元地区などのように長尾町の至るところで集落が造られるようになります。

一方、古墳時代中期～後期（今から約1,500年前～約1,400年前頃）にかけて、長尾町周辺でも、古墳が多く造られました。

例えば、北神ニュータウン内第９地点・１号墳（古墳時代中期：今から約1,500年前）や２号墳（古墳時代後期：今から約1,400年前）をはじめ、北神ニュータウン内第13号地点古墳（古墳時代後期）や北神ニュータウン内第35号地点古墳（古墳時代後期）などがあります。

また、今回出土遺物を展示する北神第２地点・第３地点古墳と北神第22地点古墳群も古墳時代後期の古墳です。




長尾町周辺の遺跡分布図（Ｓ＝1:25,000）

1. 龍ケ坪遺跡　2. 宅原遺跡有井地区　3. 宅原遺跡内垣地区
4. 宅原遺跡辻垣内地区　5. 宅原遺跡宮ノ元地区
6. 北神ニュータウンNo. 4 地点遺跡　7. 北神ニュータウンNo. 9 地点古墳
8. 北神ニュータウンNo. 35地点古墳　9. 北神ニュータウンNo. 13地点古墳
10. 北神No. 2 ・No. 3 地点古墳　11. 北神No. 22地点古墳群

## ３．北神第２地点・３地点古墳（北区鹿子台）

この古墳は、神鉄道場駅北側の丘陵の上にあります。

第２地点古墳は、直径17m、高さ約2.5mの円墳で、６世紀後半につくられたと考えられます。

埋葬施設は横穴式石室で、入口からの通路にあたる『羨道』と遺体を安置するための部屋である『玄室』という２つの部屋に分かれています。

石室の全長は8.6mで、玄室長3.8m・玄室幅2.3m、羨道長4.8m・羨道幅1.3mです。

天井石がなくなっているため、当時の石室の高さは不明ですが、玄室の高さは約2.0m以上あったと推定されます。石室に使われている石材は、この付近で取れる『凝灰質砂岩』という石です。

石室内から土器や水晶製勾玉や玉類・耳環・鉄鏃などが見つかりました。

第３地点古墳は、全長36mの前方後円墳で、６世紀中頃につくられたと考えられます。

埋葬施設は横穴式石室で、石室の全長は8.6mで、玄室長5.0m・玄室幅2.0m、羨道長3.6m・羨道幅1.1mです。石室の奥壁には、直径12.5cmの『○』印の線刻がありました。石室の中からは土器や馬具・鉄鏃・ガラス玉などが見つかりました。

この２つの古墳は、当時、この地域に勢力を持っていた首長のお墓と考えられます。

## ４．北神第２２地点古墳群（北区長尾町上津）

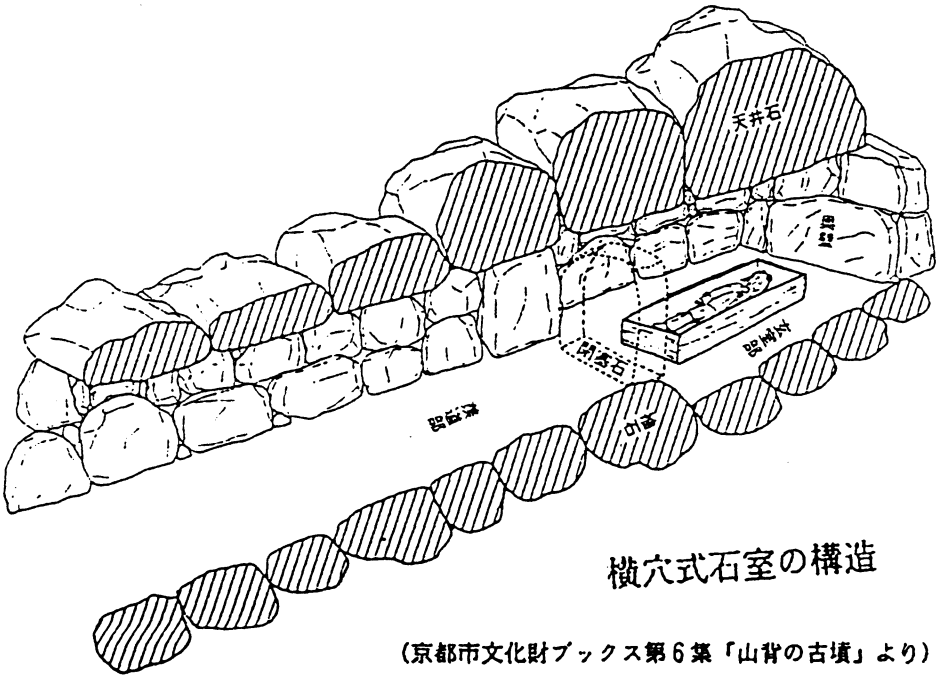
この古墳群は、中国自動車道西隣にある大歳神社の南側丘陵頂部付近にあります。

この古墳群には、３基の古墳があり、いずれも６世紀後半～７世紀初頭（今から約1,300年前頃）につくられたお墓です。

１号墳は、直径約15mの円墳（丸い形のお墓）で、盛土の裾に石を巡らしています。このような古墳は神戸市内では例はなく、珍しいものです。

２号墳は、役の行者を祀る祠のあった場所から発見されたため、盛土は削られていますが、１号墳と同様の規模であったと思われます。

３号墳は、２号墳と同様に盛土が削られていますが、直径約10mぐらいの円墳で、周囲に溝が巡っています。




横穴式石室の構造

（京都市文化財ブックス第６集「山背の古墳」より）

# 展示会・見学会資料

平成６年度

玉津南公民館

# 明石川流域の弥生の村展

平成6年5月21日～5月26日

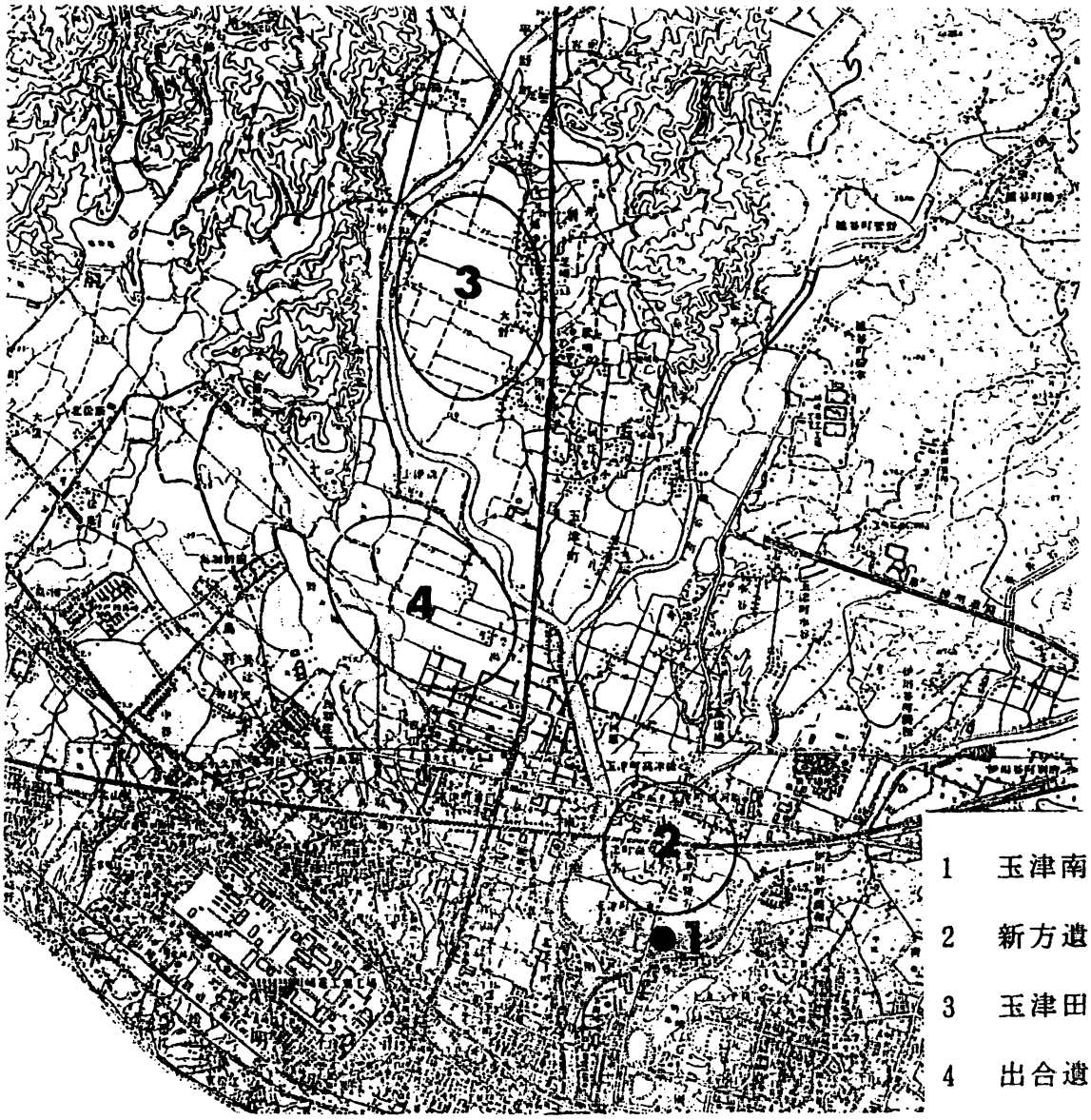
神戸市教育委員会　文化財課

## 始めに

神戸市内では毎年多くの発掘調査が行われています。西区玉津町も例外ではありません。

この玉津町には、西区の弥生時代を代表する大きな遺跡がいくつかあります。たびたび発掘調査が行われ、遺跡の内容も少しづつ明らかになり始めています。

今回はこのなかで、新方遺跡、玉津田中遺跡、出合遺跡の三遺跡を取り上げ、最近の発掘調査で出土した資料を展示しています。当時の人々の生活を想像し、郷土の歴史について理解を深めて戴ければ幸いです。




1　玉津南公民館

2　新方遺跡

3　玉津田中遺跡

4　出合遺跡

## 新方遺跡

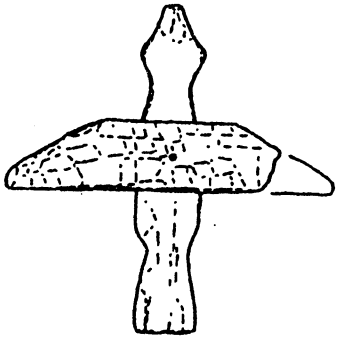
弥生時代前期に始まり、その後弥生時代を通して明石川流域の拠点となる大きな村が営まれた遺跡です。発掘調査では弥生時代中期以降の玉の原石や未完成品が多く出土しており、農耕を営みながら玉も造っていた村だと考えられます。神戸市内で弥生時代にさかのぼる玉造の村は新方遺跡だけで、周辺の村へ玉を供給していたようです。

今回は弥生時代中期の資料を展示しています。この中には紀伊（和歌山県）で作られた土器があり、広い範囲で交流のあったことがわかります。また、めずらしいものに分銅形土製品があります。人の形を形象化したものといわれており、祭祀に使用されたと思われます。

## 玉津田中遺跡

新方遺跡と共に弥生時代前期に始まり、その後弥生時代を通して明石川流域の拠点となる大きな村が営まれた遺跡です。発掘調査では住居跡、水田、墓が見つかり、未完成品を含んだ木製品も多く出土しています。建物の部材や祭祀に使用されたもの、農具など生活に使用されたものがあります。

今回展示しているのは弥生時代後期の資料です。特に目を引く資料として、土器にかごの網目の残るものがあります。かごの中に土器を入れていたところ、かごは腐りその痕跡だけが残ったものです。石器には石杵があります。朱が付着しており、朱を粉末化する為に使用したことがわかります。木製品には鳥形木製品があります。本体と羽の中央には細い孔があり、糸でくくりつけて祭祀に使用したものです。長柄鋤は鉄製の刃先を付けるために鋤先を削りこんでいます。



鳥形木製品S＝ 1/6

## 出合遺跡

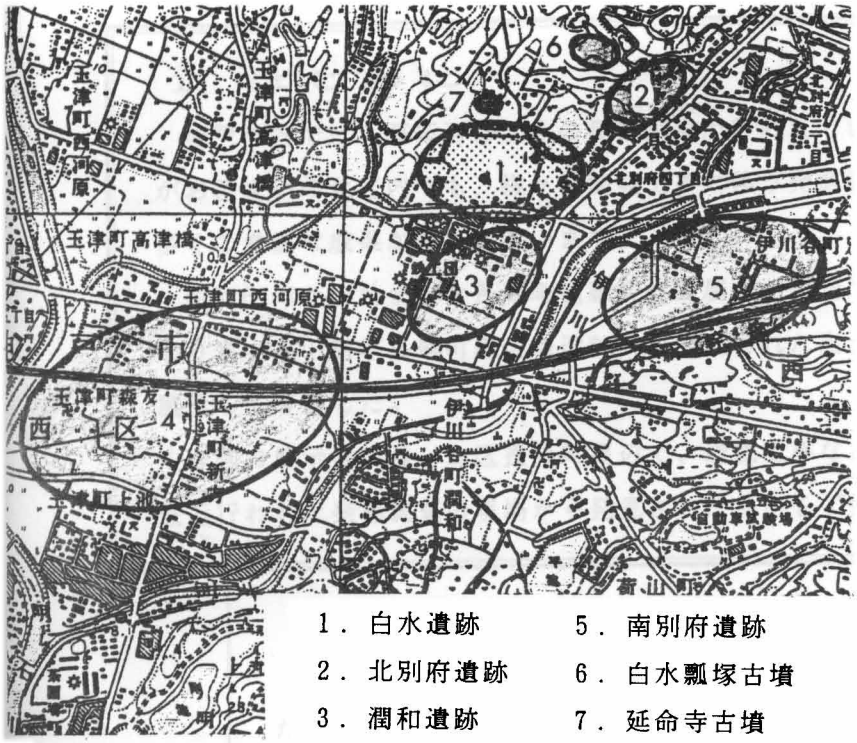
弥生時代中期に始まる村が見つかっています。玉津田中遺跡とは明石川をはさんだ対岸に隣接しており、そこから分かれた村の可能性があります。また、新方遺跡も東方約1.5kmの近い位置に接した村です。

今回は平成3年度の調査で出土した弥生時代中期の資料を展示しています。ほとんどが墓（方形周溝墓）の祭祀に使われた土器で、底部に孔を開けたものもあります。また石槍も出土しており、同じく墓の祭祀に使われたものと思われます。

# 白水遺跡の調査報告会

平成6年7月14日
神戸市教育委員会
（財）神戸市スポーツ教育公社

白水遺跡は伊川と永井谷川の合流するあたりの、伊川西岸に位置しています。
周辺には、北別府遺跡・潤和遺跡・新方遺跡、伊川の対岸には南別府遺跡、
背後の丘陵上には白水瓢塚古墳・延命寺古墳などが存在しています。




1．白水遺跡　5．南別府遺跡
2．北別府遺跡　6．白水瓢塚古墳
3．潤和遺跡　7．延命寺古墳
4．新方遺跡

白水遺跡位置図

発掘調査では古墳時代中期の自然流路・祭祀遺構、古墳時代後期の水田跡、平安時代後期の掘立柱建物などが見つかりました。その中でも、古墳時代中期の祭祀遺構は、特に目を引くものです。この祭祀遺構からは多くの土器とともに、滑石製品・鉄製品も出土しました。

この祭祀遺構は、その立地や遺物などから、水の神にかかわる祭祀であると考えられています。水によってもたらされる農作物の豊饒に対する感謝と洪水などの自然災害に対する畏れから、このような祭祀が生まれたようです。

古墳時代の祭祀の様子
（榊の木に臼玉や勾玉が飾られている）

祭祀遺構平面図

# 『第９回　長尾町埋蔵文化財展』
## ――最近の発掘調査成果より――

日時：平成６年11月１日～平成６年11月３日
場所：長尾地域福祉センター・長尾公民館
神戸市教育委員会・㈶神戸市スポーツ教育公社

### １．はじめに

神戸市内では、毎年百件近くの発掘調査が行われています。皆様がお住まいの北区内でも、様々な開発工事に伴う発掘調査が行われ、多くの貴重な成果が得られています。

昭和61年から始まった長尾町埋蔵文化財展も、今回で第９回目になりますが、毎年長尾町周辺の遺跡から発見された出土品を中心に展示してきました。

今回の展示会では、北区長尾町周辺で、造成工事などに先立って、最近行われた発掘調査の現場から発見された品々をご覧頂きます。

### ２．長尾町周辺の遺跡

長尾町周辺では、古くは縄文時代後期（今から約 4,000年前）頃から人が住みはじめたと考えられます。

宅原遺跡内垣地区で、この時代の土器が出土したり、善入川流域の龍ケ坪遺跡で、縄文時代の石鏃（石の矢じり）等の石器が見つかっています。

やがて、弥生時代になると、北神ニュータウン第４地点遺跡のように、丘陵上に集落が造られるようになり、宅原遺跡内垣地区でも、竪穴住居が造られ、人々が生活を営んでいました。

古墳時代になると、宅原遺跡有井地区・辻垣内地区・宮ノ元地区などのように長尾町の至るところで集落が造られるようになります。

一方、古墳時代中期～後期（今から約 1,500年前～約 1,400年前頃）にかけて、長尾町周辺でも古墳が多く造られました。

例えば、北神ニュータウン内第９地点・１号墳（古墳時代中期：今から約 1,500年前）や２号墳（古墳時代後期：今から約 1,400年前）をはじめ、北神ニュータウン内第13号地点古墳（古墳時代後期）などがあります。

その後も飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代そして現代に至るまで、連綿と集落が営まれています。

## 3．各遺跡の説明

①龍ケ坪遺跡・第3次調査

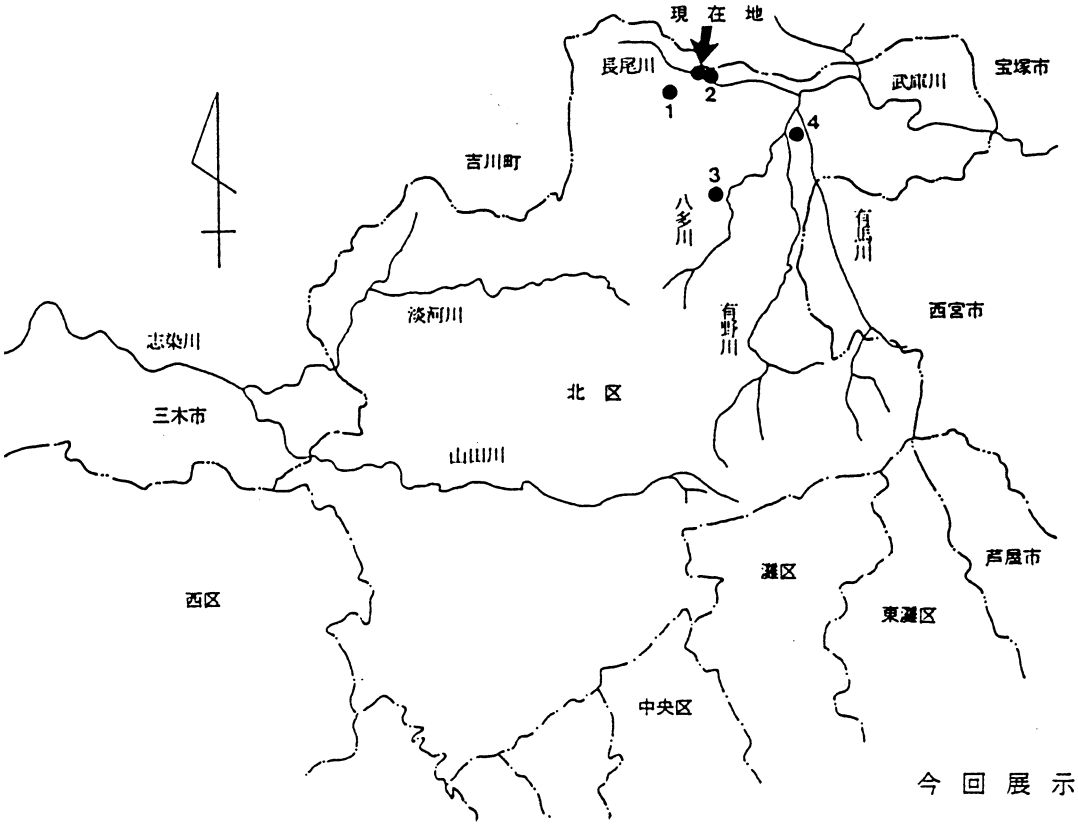
平成5年度に市道・長尾線街路築造工事に先立って行われた発掘調査です。

調査の結果、平安時代（今から約 1,000年前から約 1,200年前）頃にかけての掘立柱建物4棟や溝・土坑などが検出され、古墳時代後期（今から約 1,400年前）から鎌倉時代頃（今から約 800年前頃）の土器が出土しています。

②宅原遺跡・有井地区第3次調査

平成5年度に長尾小学校校舎改築工事に先立って行われた発掘調査です。

調査の結果、鎌倉時代（今から約 800年前頃）の柱穴・土坑をはじめ、谷状地形の下層で古墳時代後期（今から約 1,400年前頃）から奈良時代（今から約 1,400年前頃）の土器や木製品が出土しています。




1．龍ケ坪遺跡
2．宅原遺跡・有井地区
3．上小名田遺跡
4．日下部北遺跡

今回展示した遺跡の位置図

③上小名田遺跡

平成5年度に八多地区・土地改良事業に先立って行われた発掘調査です。

調査の結果、古墳時代中期末～後期頃（今から約 1,400年前頃）の竪穴住居をはじめ、鎌倉時代（今から約 800年前頃）から室町時代（今から約 600年前頃）にかけての遺構や遺物が検出されました。

④日下部北遺跡

平成5年度に県道三木・三田線自歩道設置工事に先立って行われた発掘調査です。

調査の結果、平安時代（今から約 1,000年前）から鎌倉時代（今から約 800年前）頃にかけての溝・土坑・井戸・柱穴などが検出され、飛鳥時代（今から約 1,300年前）から鎌倉時代の遺物が出土しています。

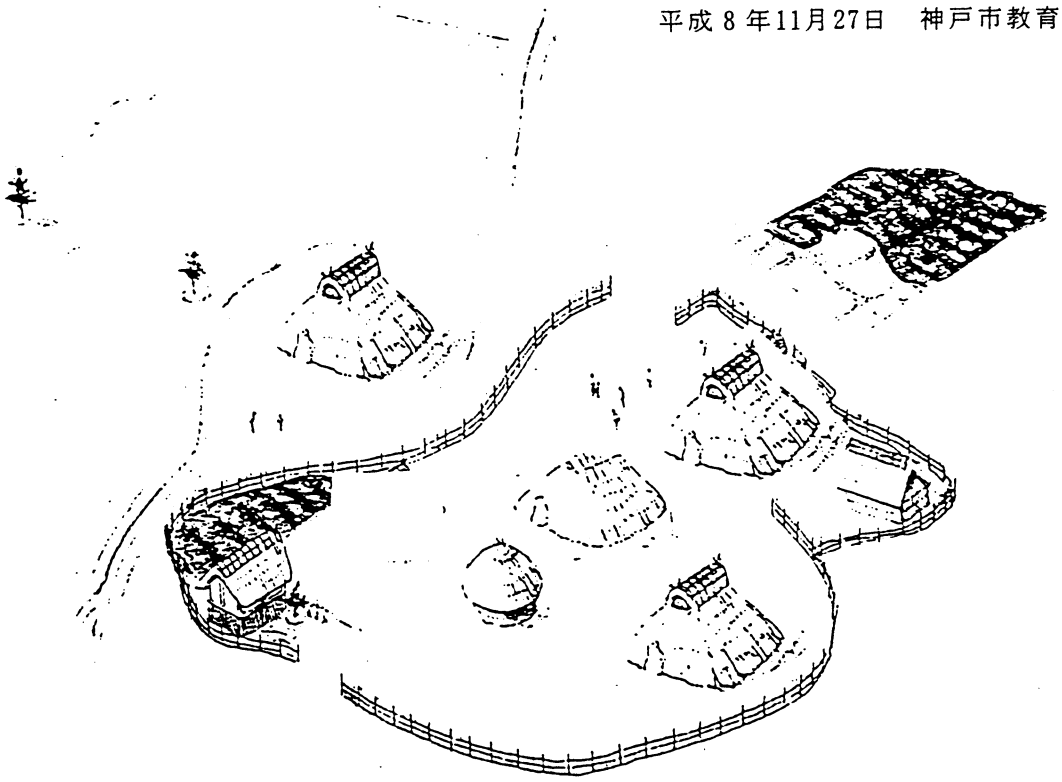
# 展示会・見学会資料

平成８年度

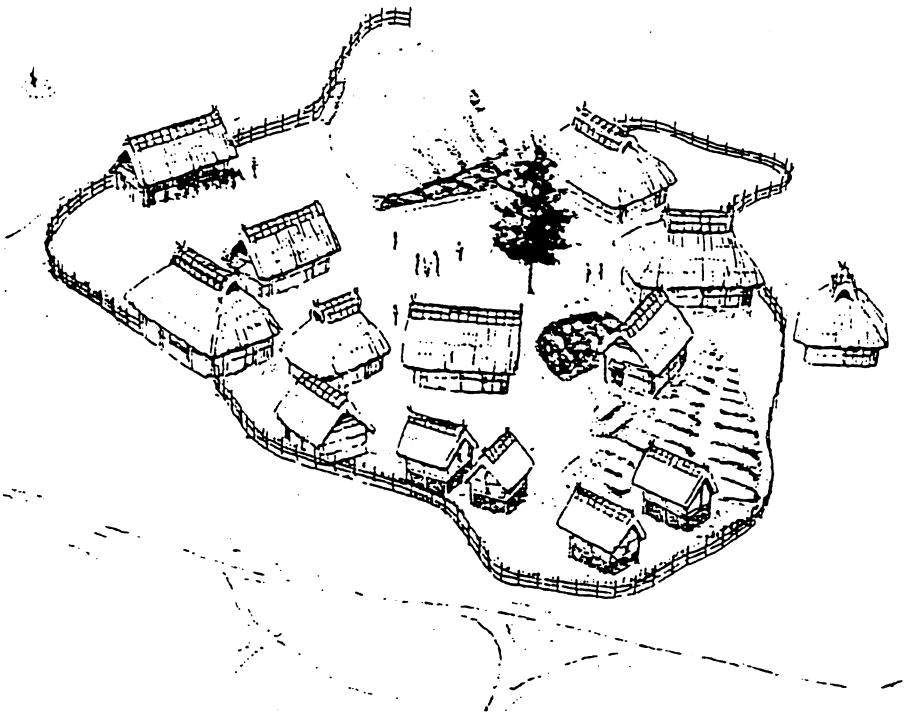
# 当時の集落のうつりかわり

勝雄遺跡　淡河小学校見学会資料

平成8年11月27日　神戸市教育委員会文化財課



竪穴住居の村　（イメージ図）



掘立柱建物の村　（イメージ図）

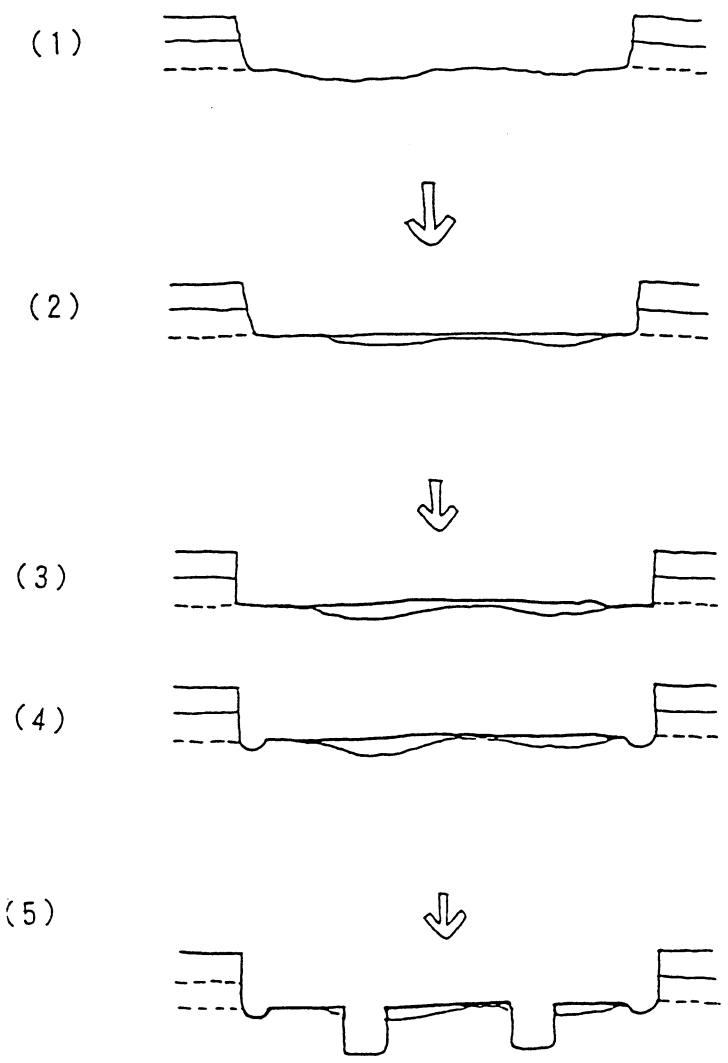
『復元日本大観5　古代住居と古墳』世界文化社

より一部改変転載

# 竪穴住居を建てる

『古代の村』より転載

床面のつくり方




(1) まず敷地が選ばれ住居の輪郭が決められる。この輪郭にそって地面が掘りおこされるが、これは荒掘りで、床面をととのえていない。地表から60cm～70cmほの深さまで掘っている。

(2) つぎに掘り上げた土を一部もどして、床面の凹凸をならして水平にする。

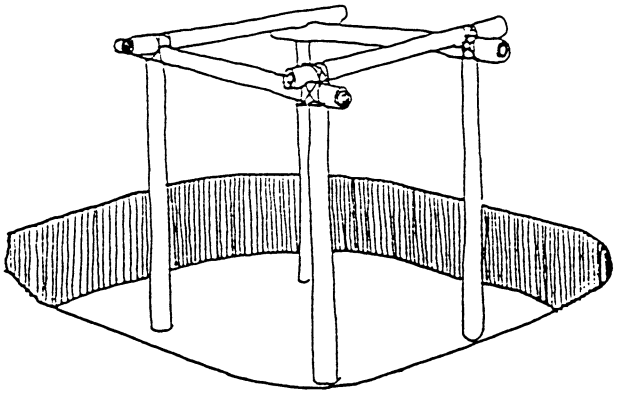
(3) 床面ができると、カマドの位置がきめられ、床面もカマドの部分だけ掘り下げられ粘土・山砂によってカマドがつくり付けられる。

(4) カマドがつくられると、つづいて周囲の壁がととのえられる。壁のととのえと共に周囲に溝がほりこまれ、壁板を立てる準備が終了する。

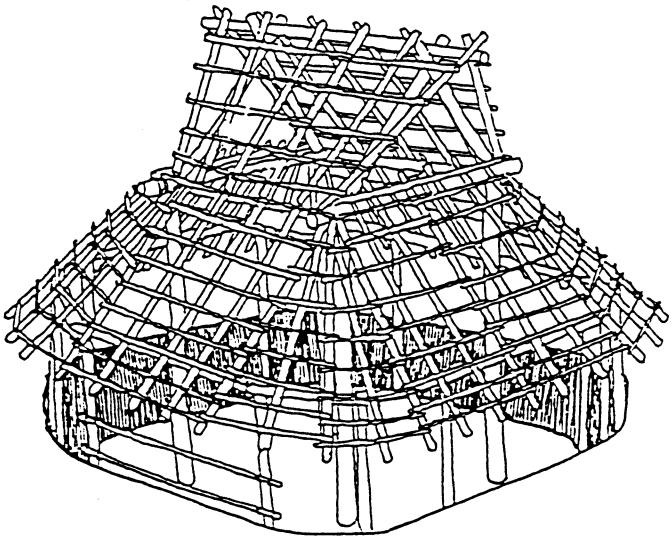
(5) 壁溝がつくられると、今度は柱の位置が決められ、床面に柱穴が掘られる。

次に上屋がつくられる。

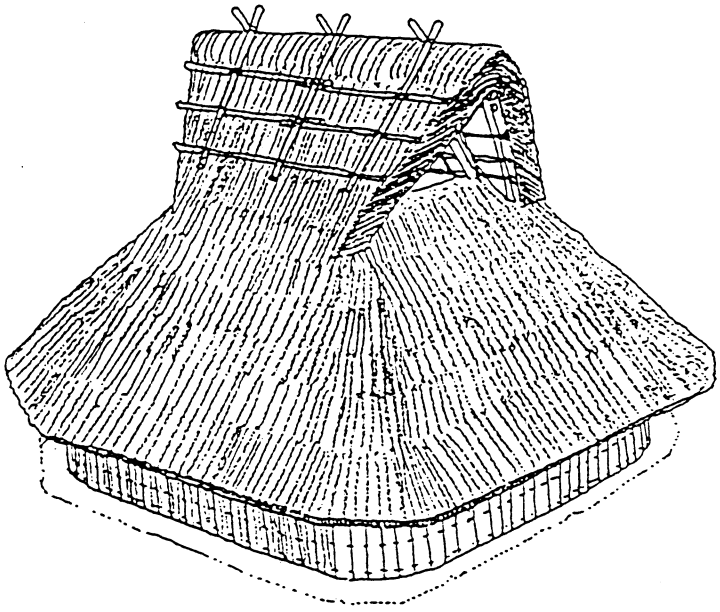
（6）まず、柱穴に柱が立てられ、柱の上には桁がかけられ、その上に梁がわたされる。



（7）そして，梁の上に合掌がつくられその上に棟木がのせられる。この棟木に垂木がのせられ、垂木の上に草葺の屋根がかけられる。



（8）最後に、壁面がつくられ壁溝に板材をたてていって周囲から土の崩れを防いでいる。竪穴住居の建築作業は一応終了する。床は土間となるわけだが、敷物・わらや草をしいていたのだろう。



# 遺跡が語る淡河の歴史

はじめに　天正7年（1579）、羽柴秀吉は淡河町に対して、商業の中心として月に6回の定期市を開く事や、この時に税金を徴収しない「楽市」とすること等を定めた制札を掲げました。これは三木合戦の際、別所方についた淡河定範が淡河城を捨て、三木城に合流した後、淡川（河）市庭に出されたものです。これ以降、有馬と三木をむすぶ湯山街道の宿場町として淡河町が発展していくこととなりました。

上の話は淡河町の歴史を語る時に欠くことが出来ませんが、淡河町の歴史はこれを遥に遡ることが明らかになってきています。

淡河町地域福祉センターの開設1周年に当たり、淡河町の歴史を遺跡の発掘調査から得られた様々な資料から見直してみようと企画されたのが、今回の展示という形になりました。郷土の歴史を理解される一助となれば幸いと思っています。

縄文人の登場　縄文時代は、今から約10000年前から約2500年前まで続く時代です。土器の形や文様の変化をもとに早期・前期・中期・後期・晩期の5期に分けられています。

最古の石器　萩原遺跡で見つかった石器の中で、有茎尖頭器（ゆうけいせんとうき）とよばれる今から約10000年以上前の槍先または鏃と考えられるものがあります。有茎尖頭器は縄文時代以前の槍先と考える人と、縄文時代でも早期以前に草創期を設け小型のものは特に草創期～早期の鏃と考える人がいます。

有茎尖頭器は北区ではこのほか、長尾町宅原遺跡や上津遺跡、山田町下谷上遺跡で出土しています。

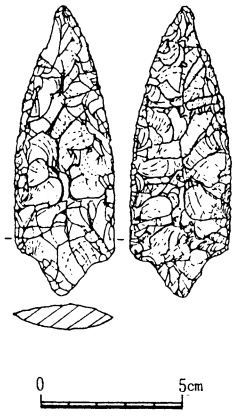
野瀬の中山大和池遺跡では、いまから約6000年～5000年前の前期の土器が採集されています。

中村遺跡では今から約4500年～4000年前の中期の住居跡が発掘されました。最大幅約5．7mで地面を約60cm掘り下げた、隅にやや円みを持つ方形の竪穴住居跡です。5本の柱穴と、中央に石で囲んだ炉を持っていました。中から石棒・石鏃・磨石・石皿等が出土しました。この内、石棒はなんらかの祭祀に係わる物と考えられています。

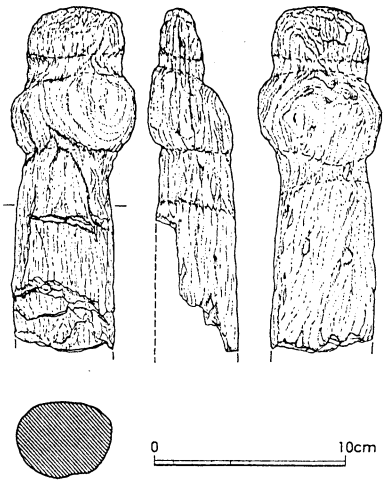
萩原遺跡では、今から約4000年～3500年前の後期の穴から、土器や石鏃、石匙（動物の皮を剥ぐ道具）や石器を作った残りの剥片などが出土しています。

この他、縄文時代と思われる石器は神田や南僧尾、萩原城でも出土しています。

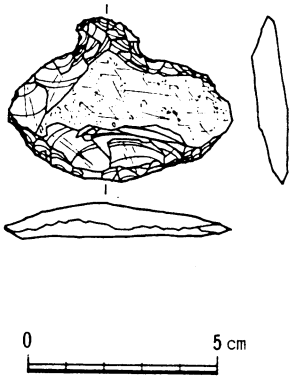
縄文時代は、狩猟や採集が生活の基本となっていたと考えられています。淡河町に当時の遺跡が存在するのはこの地が自然に恵まれた環境であった証拠とも言えましょう。




下谷上遺跡・有茎尖頭器




中村遺跡・石棒




神田遺跡・石匙

**稲作の始まり**　今から約２５００年～１７００年前の弥生時代は、日本列島で本格的に農耕が開始された時代と言えます。弥生時代も土器の特徴をとらえて、前期・中期・後期と区分されています。

北区の前期、中期の遺跡は道場町塩田付近に集中しています。淡河町では淡河城の調査の際後期の終わり頃の一辺約６．５ｍの隅円方形の竪穴住居跡が検出されています。また、淡河町淡河や中村でもこの頃の土器が見つかっています。この付近を水田や畑にするため、開墾に汗する昔の人々の姿が目に浮かびます。

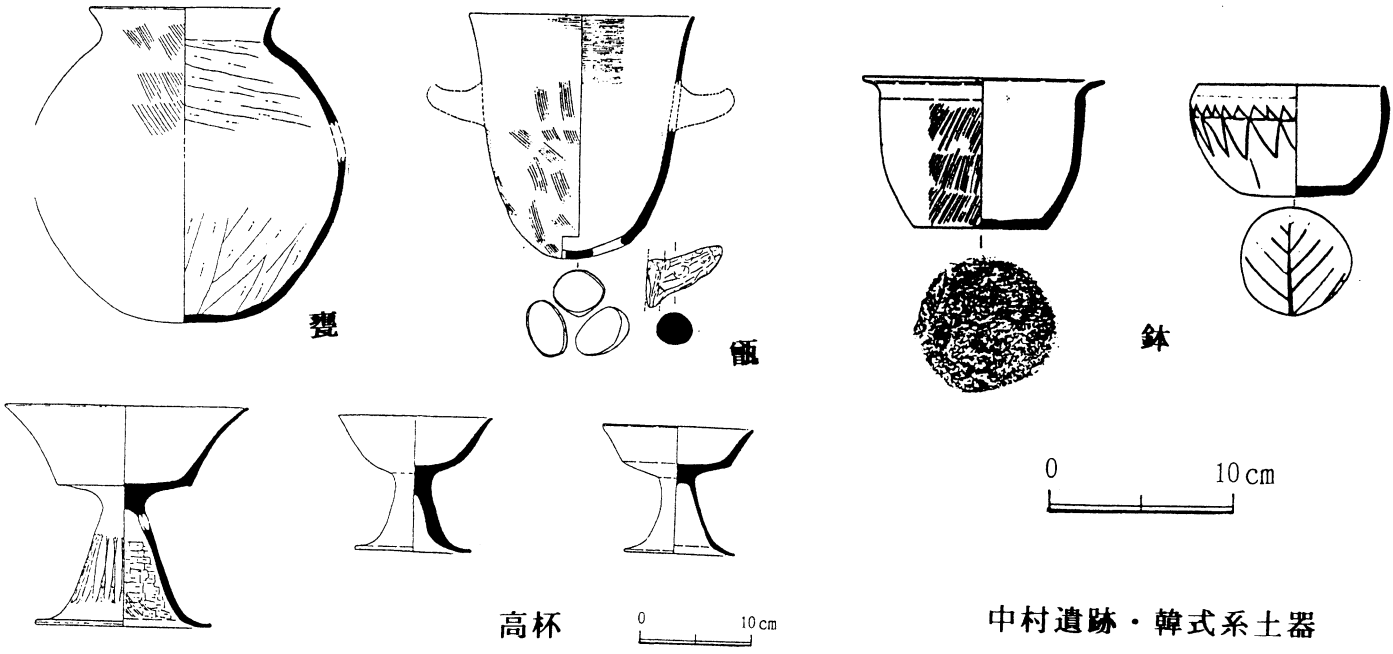
**古墳を作る人々**　農業が始まり、余剰が蓄えられるようになり、やがてそれを管理する者が現れると社会はより複雑さを増していくことになります。ある地域の指導者が、高く土を盛り上げた墓をさかんに築く時代を、古墳時代と呼んでいます。今から約１７００年～１４００年前の事です。

この古墳時代も、古墳の形や、あり方、またそれに副葬する品々の変化で４世紀代の前期・５世紀代の中期・６～７世紀代の後期と分けられています。

先年、多くの銅鏡が出た灘区の西求女塚古墳は前期、神戸市で最大規模を誇る五色塚古墳は前期～中期に属しています。後期になると直径が１０ｍ前後の小規模の古墳が、ある地域に集中して築かれるようになります。北区道場町付近には、このような古墳の例が多く見られます。

淡河町内では、今までに古墳は確認されていませんが、古墳時代でも中期、５世紀後半の住居跡が中村遺跡にあります。長辺約４．７ｍ、短辺約３．７ｍの長方形の竪穴住居跡で、住居内から朝鮮半島南部の土器とよく似た、韓式系土器と言われる土器が出土しています。韓式系土器は神戸市内でも、南側の海岸沿いの数カ所の遺跡から出ていますが、内陸部からの出土ははじめてのことです。当時この地域は決して閉ざされた地域ではなく、瀬戸内海地域や、更に朝鮮半島南部にまで何らかの関わりを持っていた、開かれた土地であった事が推定されます。

古墳時代でも後期の住居跡は、萩原遺跡の調査で検出されています。



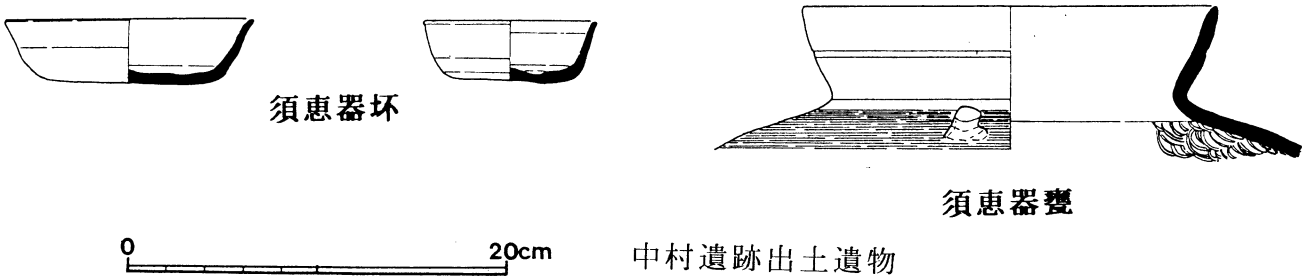

中村遺跡・土師器

中村遺跡・韓式系土器

**国家の発展**　都が奈良に置かれ、地方に国一郡一里（郷）というような行政単位が設けられるようになった8世紀代の時代を、奈良時代と言います。

この淡河町は播磨国美嚢郡志染郷の一部に当たると考えられています。奈良時代の淡河町についてはまだ不明の所が多く、遺跡もそれほど知られていません。

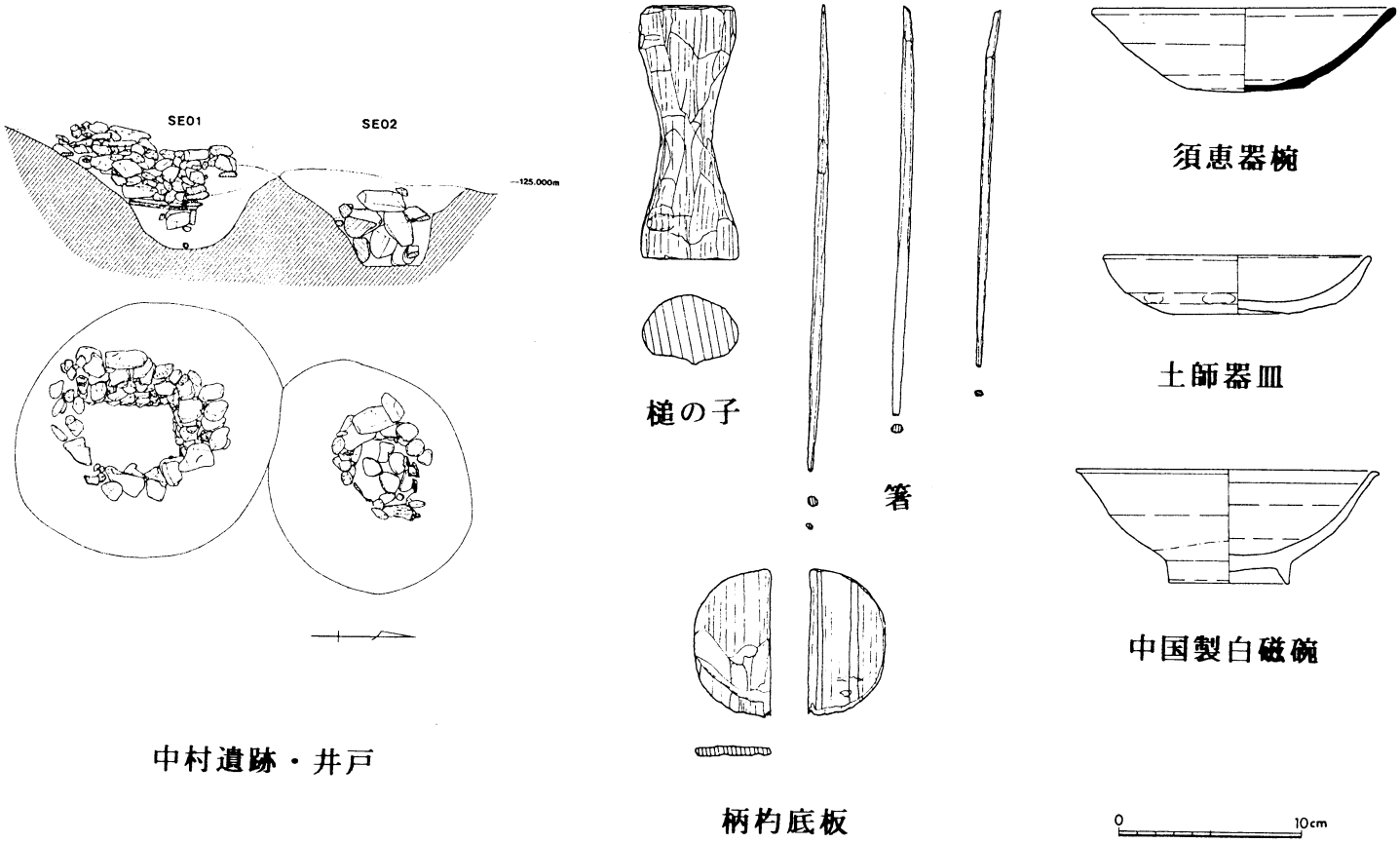
中村遺跡では掘立柱建物と土坑が、萩原遺跡では当時の土器が発掘されていますが、調査が進めばより具体的な姿を把握することができるようになるでしょう。




中村遺跡出土遺物

**荘園の時代へ**　都が京都にあった8世紀末から12世紀末までを平安時代と言います。奈良時代、土地は基本的に国有で、国民には班田収受といって土地が分配されていました。ただ、そのなかで貴族や有力な寺社は荘園と言う私有地を持ちはじめました。この私有地である荘園が、土地制度のなかでおおきな比重を持つようになったのが、平安時代から室町時代にかけての事です。ただ、淡河町での平安時代の荘園の動向はいまだ明確ではありません。

中村遺跡では、12世紀前半ごろの井戸が2基発掘され、内部から土器、柄杓、槌の子、箸や種子などが出土しました。また、萩原遺跡でも当時の土器類が多く出土しています。

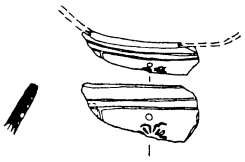



中村遺跡・井戸

**武士の成長**　源頼朝によって鎌倉に幕府が開かれ、武士と従来の貴族のいわば2つの政府が出来た13世紀から14世紀半ばまでを鎌倉時代と言います。この淡河町でも、まえに述べた荘園制度が定着していたことが13世紀前半の文書に「淡河御庄」の文字が見られることで推定できます。この淡河御庄（荘）が誰のものであったかは不明ですが、「武家所領」と記されています。13世紀の後半、淡河地域の領主として、平時俊という人物が知られていますが、この時俊の一族が後の淡河氏として成長していったとも言われています。

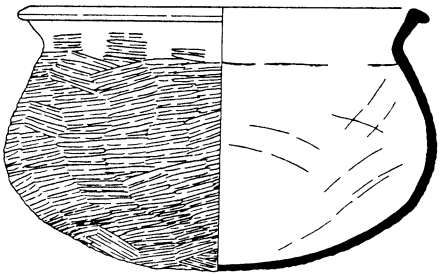
淡河氏との関係は明らかではありませんが、中村遺跡では13世紀中頃の屋敷地の一部ではないかと見られる溝や柵列が検出され、鎌倉～室町時代のものと考えられる高麗象嵌青磁という当時の高級磁器が神戸市内では始めて出土しました。さらに萩原遺跡では13世紀代の極めて珍しい六角形の木枠のある井戸が発掘され、有力者の存在を彷彿とさせました。

また、行原遺跡では大きな掘立柱建物と火葬するための長方形の穴が2基見つかりました。火葬土坑の床面には敷石があり、また供えられた土器などが出土しました。

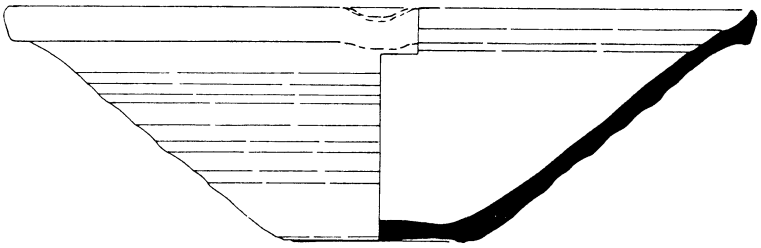


高麗象嵌青磁

0　10cm



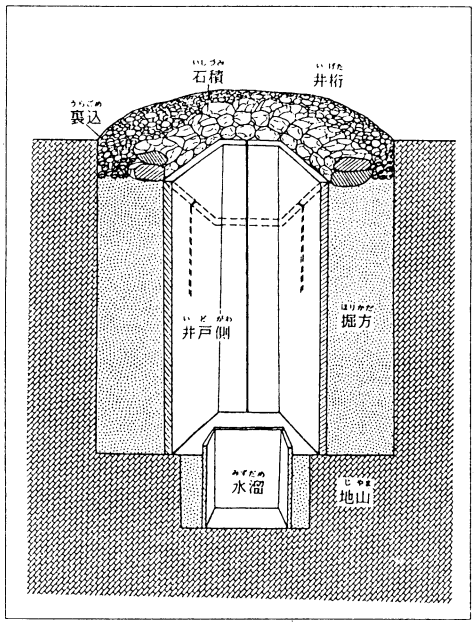
土師器鍋



須恵器捏鉢

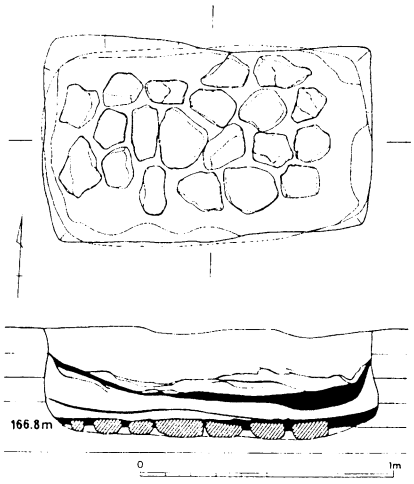
0　20cm

中村遺跡出土遺物

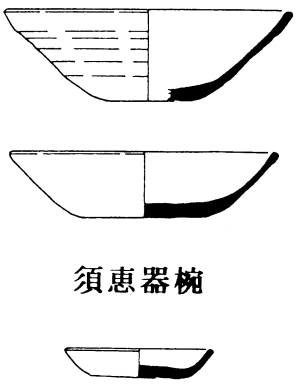



井戸模式図

萩原遺跡・六角形井戸

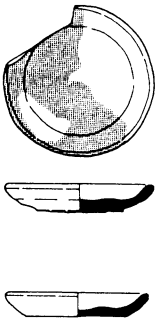



行原遺跡・火葬土坑



須恵器椀

須恵器小皿



土師器小皿

0　20cm

行原遺跡・火葬土坑出土遺物

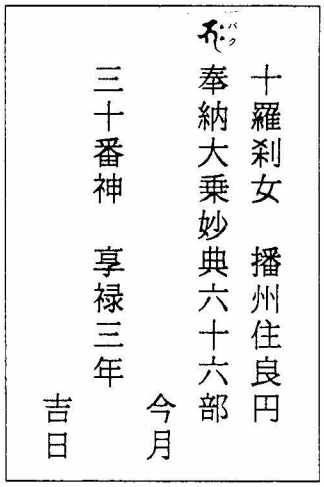
戦乱から天下統一へ　源氏の鎌倉幕府にかわって、足利尊氏が京都の室町に幕府を開いた１３３８年から信長が幕府最後の義昭を追討した１５７３年までを室町時代といい、これ以後江戸時代までを安土桃山時代とよんでいます。

勝雄の山中で最近発掘された経塚は、室町時代に属します。経塚とは、平安時代のおわり頃から流行した末法思想を受け、釈迦入滅から５６億７千万年後の弥勒出現まで経典を地下に埋納・保存しようという願意や、現世利益・追善供養の願意に基づくものと見られています。

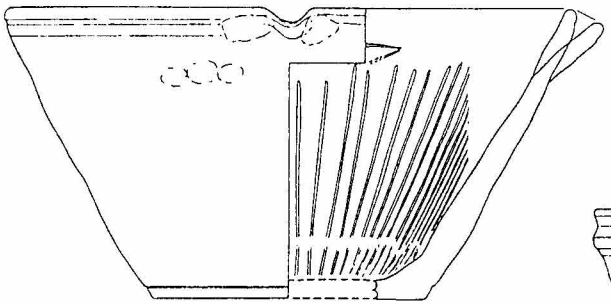
勝雄経塚では、法華経８巻が完存していました。さらに、その入れ物（経筒）に刻まれた文字から、播州住人の良円が、願主のため諸国に収めた法華経６６部の内の１部がこれであることが判りました。１６世紀代には、自分の福利を願う「逆修」や父母などの追善供養のため諸国に経を収めることが盛んになり、またそれを実際に行う巡礼の行脚僧（勝雄の場合は良円）を「六十六部聖」とか「六部さん」とよんでいました。

この時代はまた、商業が発達し貨幣がよく使用されるようになります。奈良時代・平安時代にも貨幣はありましたし、鎌倉時代中期以降には、田畑・屋敷地などの売買に貨幣が使用される機会が急速に増えるようになりました。そして室町時代には貨幣は社会に必要不可欠なものとなっていきました。しかし政府は平安時代の９５８年を最後に、銅不足やそれからくる粗悪貨幣の発行・信用失墜もあって、銭貨を作ることをやめていましたので、平氏や幕府は中国から銅貨を輸入しわが国で流通させていました。このような渡来銭のなかには唐時代、宋時代や明時代の銅銭が混在していました。萩原城や勝雄遺跡で出土した銅貨はこの頃使用されていたものでしょう。

１６世紀の後半は戦乱の時代で、信長・秀吉などは天下統一のために鉄砲を戦術のなかに積極的にとりいれました。そのころ、信長に反旗をひるがえした別所長治に与した淡河氏を打倒するため、萩原城には有馬則頼がいました。則頼が鉄砲を使用していたかは定かでありませんが、萩原城の調査では鉛製の鉄砲玉が３点出土しています。またここでは、１６世紀代の小柄（脇差の鞘にそえる小刀）などが見つかっています。



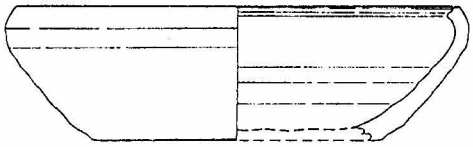

勝雄経塚銘文
（享録３年　１５３０年）



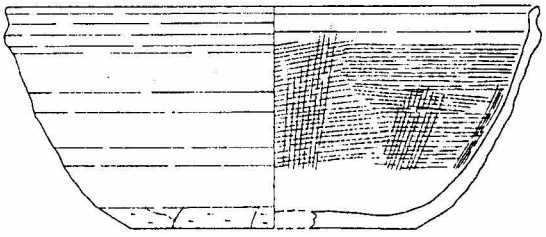
丹波スリ鉢

萩原城遺跡出土遺物

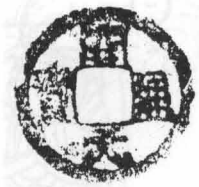
0　20cm



備前鉢

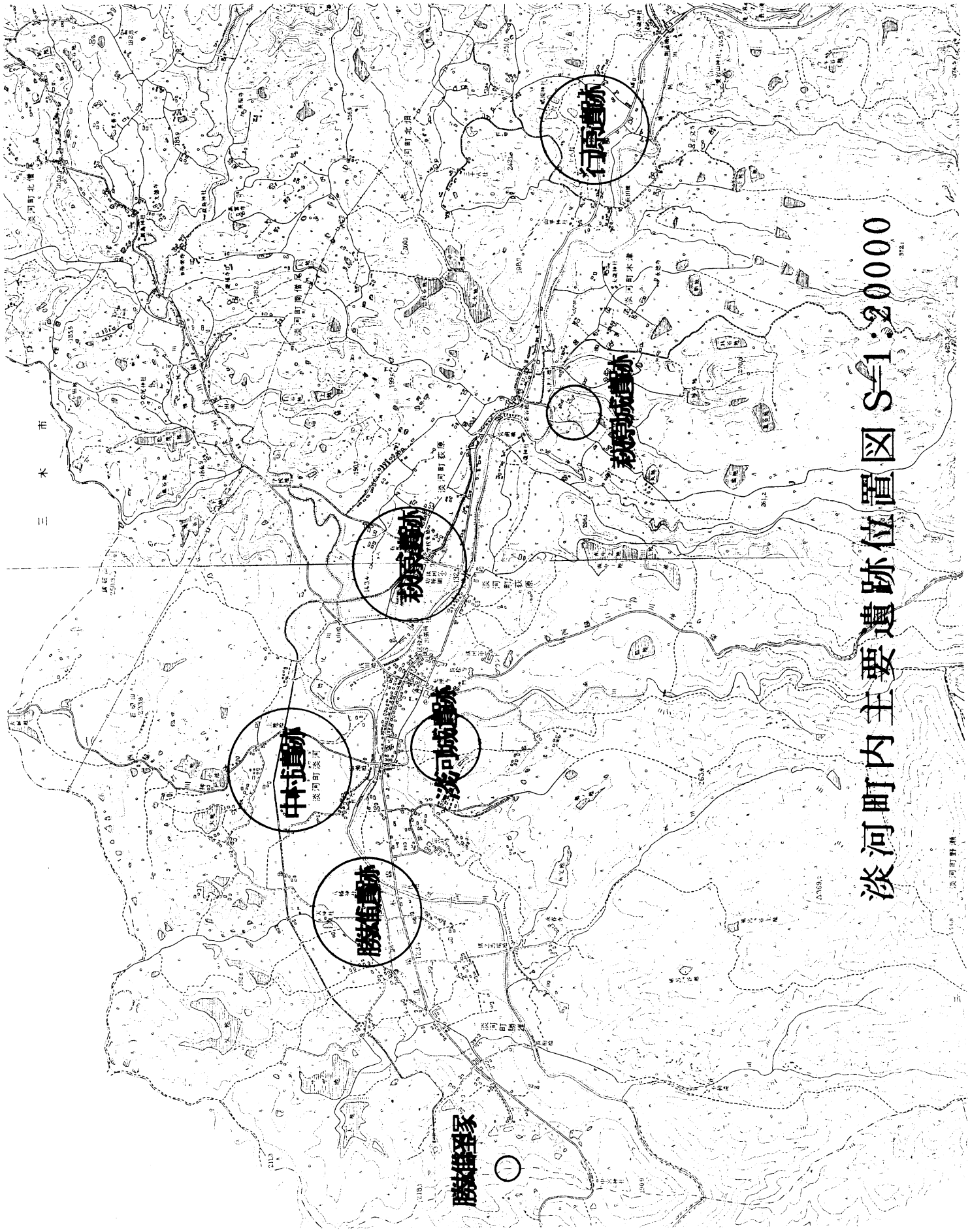


土師器スリ鉢



勝雄遺跡・開元通寶
（唐時代初鋳６２１年）

萩原城遺跡・元豊通寶
（宋時代初鋳１０７８年）




・「遺跡が語る淡河の歴史」展
・場所　淡河町地域福祉センター　・主催　神戸市教育委員会文化財課
・期間　平成８年４月２８日～同年５月６日
＊この展示に当たっては、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所並びに淡神文化財協会のご協力を得ました。

# 出土品から見た兵庫津

古くは大輪田泊と言った兵庫の港は、奈良時代からの歴史を持っています。

偶然に発見された『兵庫北関入船納帳』は、いまから５５１年前の兵庫津の様子を私達の前に活き活きと再現してくれるものです。そこには、現在の岡山県、広島県や愛媛県からの塩、岡山県からの備前焼の陶器を乗せた船が入港していたことが記されています。

兵庫津はこの後、応仁の乱や慶長の大地震で打撃を受けますが、そのたびごとに復興し江戸時代には江戸幕府の直轄領となるほど重要な地位を占めるようになりました。

今回ここに展示しますものは、神戸市教育委員会が平成２年に、兵庫区西仲町で行った発掘調査で出土した鎌倉時代から江戸時代の遺物です。

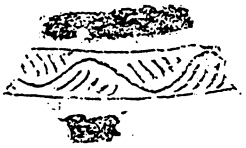
これらは、当時の人々の生活・信仰・産業や商品流通の実態を私たちに教えてくれるものです。今回の展示が、兵庫の歴史をより深く知ろうとされる方々の一助となれば幸いです。

**瓦**　瓦の文様には、色々なものがあります。

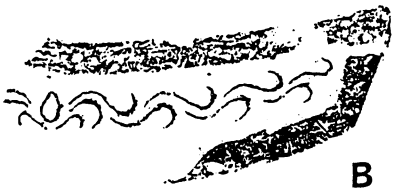
Ａは唐草文様で、時代が新しくなると波形文様に変化します。

Ｂも同じく唐草文様ですが、中心に卵形の飾りがあります。

Ａと同じ文様の瓦は灘区五毛遺跡に、Ｂと同じ文様の瓦は淡路三原町の成相寺にあります。同じ文様の瓦を調べることで、当時の瓦職人の活動の様子がわかるようになります。



A



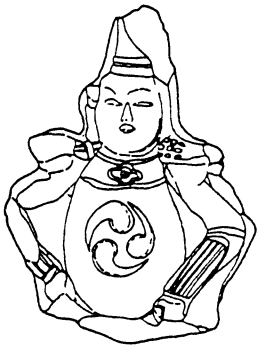
B

実物の４０％縮小

**土人形**　近畿で有名な人形と言えば、京都の伏見人形です。室町時代の末ごろは伏見稲荷参詣のお土産として、壺などのミニチュアが「つぼつぼ」などと言って売られていました。

江戸時代になると、伏見の影響を受けて大阪や堺などでも人形が１８世紀～１９世紀にかけて多く作られました。

兵庫津遺跡では展示したものの他、大黒天・馬乗り異国人・俵を持ち上げる人・鳥・灯籠・船・鈴・面などが出土しています。



神像

観音菩薩

釈迦如来

実物大

**陶磁器**　兵庫津遺跡では、色々なところで焼かれた陶磁器が出土しています。

今回は展示していませんが、室町時代には東播磨産のコネ鉢・碗、奈良産の火鉢、岡山産の備前焼のスリ鉢・壺、愛知の常滑焼の甕をはじめ、遠くは中国から輸入された青磁・白磁の碗や皿などが使われていました。

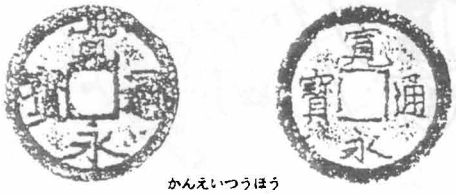
肥前系磁器は一般に言う伊万里焼で、佐賀県有田町を中心にわが国で始めて生産された磁器です。兵庫津には１７世紀の前半には運ばれており、１８世紀には碗、皿、水滴や鬢付油壺、お神酒徳利、仏飯器などが多く持ち込まれています。

肥前産京焼風陶器や、瀬戸美濃系京焼写し陶器は、１７世紀後半～１８世紀前半に京都の京焼を模して佐賀県や岐阜・愛知県で作られたものです。この他当遺跡からは、兵庫県丹波焼のスリ鉢・壺、大阪堺のスリ鉢や塩を入れた小型の壺などが出土しています。

**お金**　日本では、１０世紀に政府の貨幣鋳造が中止されたのち、鎌倉・室町時代を通じて中国から輸入された銅銭が使用されていました。しかしそれらの銭も長期の使用で粗悪な銅銭（鐚銭）が生じて、鐚銭の受取拒否などの混乱がおこって来ました。

江戸幕府は、流通経済に害をもたらすこのような状況を解決するために、寛永１３（１６３６）年に「寛永通宝」を公鋳し始めました。寛永通宝は１７８０年までの約１５０年間という長期にわたって作られた一文銭です。

「宝永通宝」は寛永通宝の価値の１０倍１０文銭でしたが、実際の重量は寛永通宝の３枚程度しかなく、一般に受け入れられず１７０８年から１７０９年のわずか１年で通用されなくなったものです。



寛永通宝

宝永通宝

・「兵庫津遺跡展」資料　　・場所　兵庫図書館
・平成８年５月１３日　　・神戸市教育委員会社会教育部文化財課

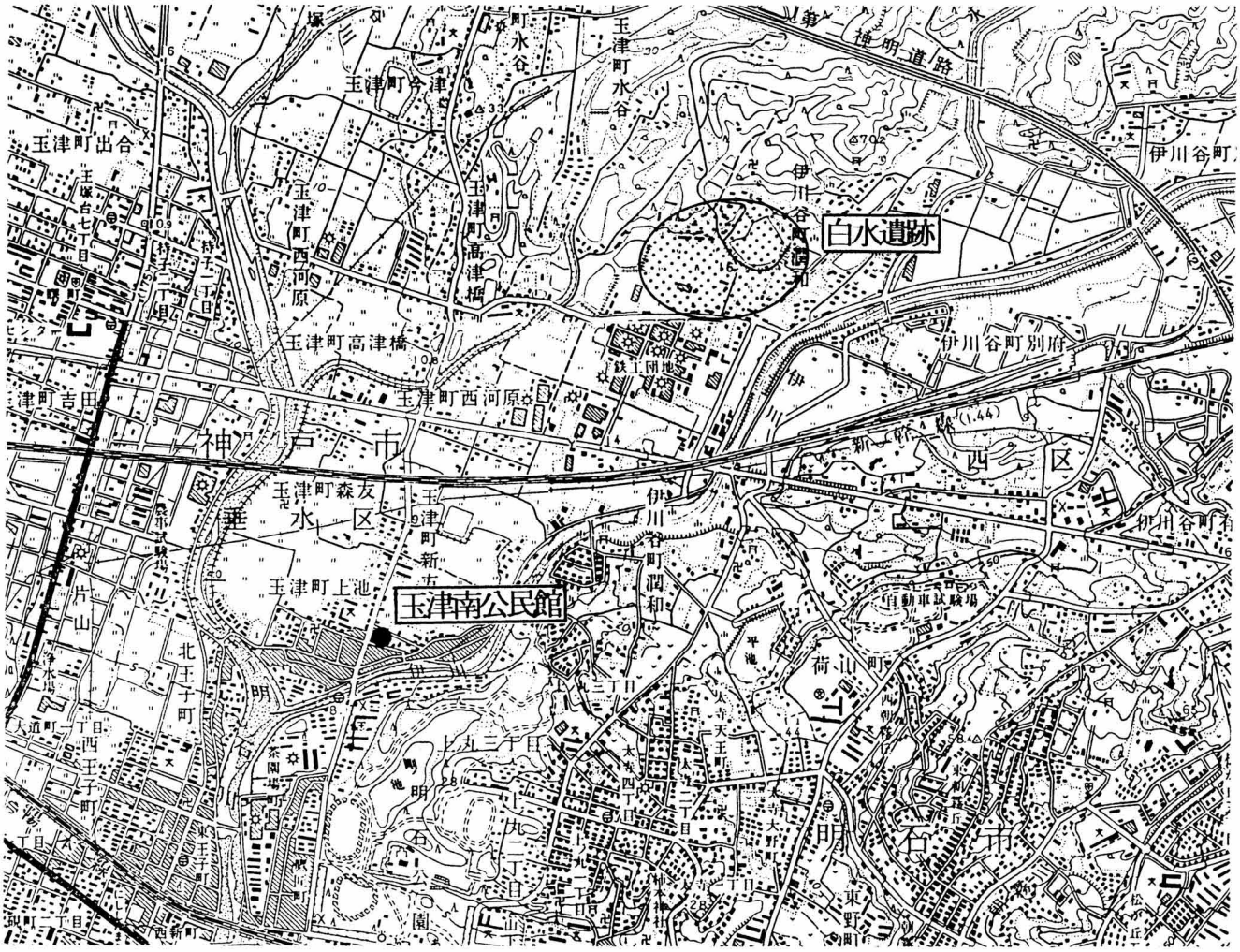
玉津南公民館　第12回文化財展

# 白水（しらみず）遺跡展

平成8年5月25日～5月30日
神戸市教育委員会　文化財課

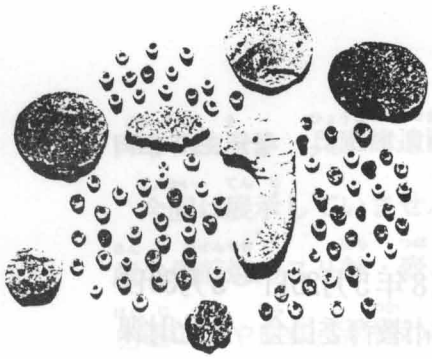
明石川の流れによって、はぐくまれた玉津町周辺の豊かな大地には、多くの遺跡が眠っています。こうした遺跡の調査によって、古代の人々の生活が徐々に明らかとなってきています。

今回の文化財展では、近年の発掘調査でまとまった成果をあげた「白水遺跡」を紹介します。土の中からよみがえった古代の土器から、何か新しい発見ができないでしょうか。




白水遺跡は、西区伊川谷町潤和にある遺跡で、明石川の支流である伊川の下流域西岸に立地する弥生時代～近世の複合遺跡です。平成4年度から始まった発掘調査は、白水地区の特定区画整理事業に伴うもので、調査地は丘陵の末端部から沖積地にかけての範囲で行われてきました。

これまでの調査では、弥生時代末・古墳時代・平安時代～鎌倉時代を中心とするさまざまな遺構・遺物が発見されています。



**古墳時代中期**（今から約1500年前ごろ）

竪穴住居や川の跡などが発見されています。

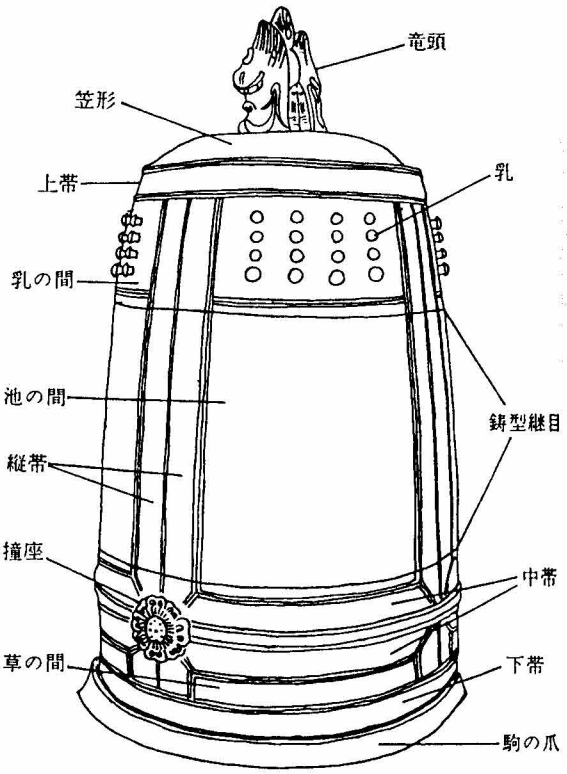
川の跡からは、鋤・竪杵などの木製品や製塩土器などが出土しています。また、滑石製の玉類が多数出土しており、水辺の祭りが行われていたと推定されます。この水辺の祭りでは、いろいろな土器と滑石製の玉類（勾玉・臼玉・双孔円板）や鉄製品を使って、神に祈りをささげたものと考えられます。

**平安時代前期～後期**（今から約1100～ 700年前ごろ）

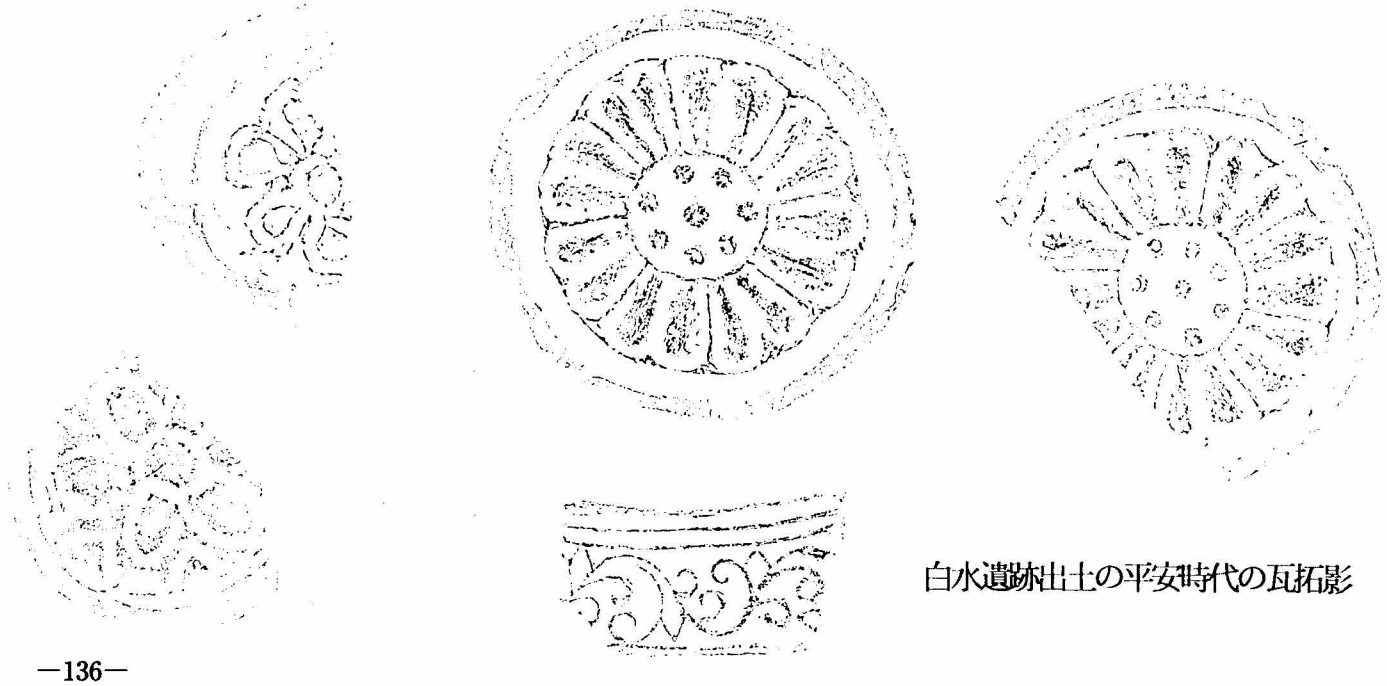
掘立柱建物跡・溝や梵鐘（釣鐘）の鋳造遺構などの多くの遺構や遺物が発見されています。

これらの中で、梵鐘鋳造遺構は兵庫県内では７例目の発見となります。定盤（梵鐘の鋳型を据えつけるための台）が良好に残っており、ほぼ完全な形で出土しています。梵鐘の鋳型や溶解炉（原料となる銅を溶かす炉）壁も一緒に出土しており、当時の鋳造技術を探る上で貴重な資料です。定盤の大きさから復元できる梵鐘の口径は約60cmとなります。今回発見された梵鐘の鋳型には銘文が刻まれており、現在までに「之」・「并」・「七」などの文字が判読されています。

また、梵鐘鋳造遺構が発見された周囲の調査区からは平安時代前期～後期の瓦片が多量に出土しており、字名として残る「延命寺」と呼ばれた古代の寺院が近くにあると推定でき、この寺院で使われる梵鐘が今回発見された鋳造遺構で製作されたと考えられます。




和鐘各部分の名称



白水遺跡出土の平安時代の瓦拓影

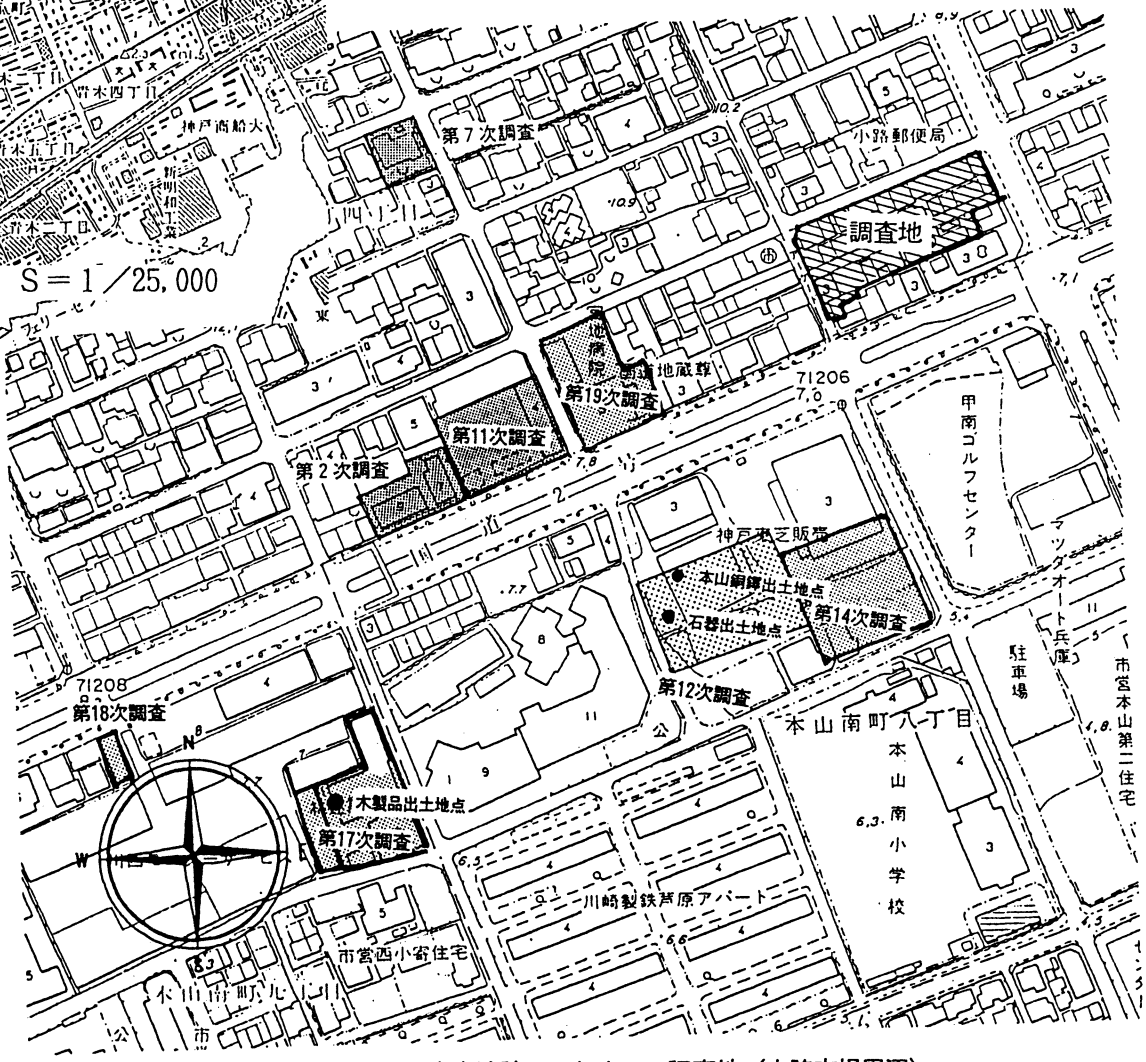
# 本山遺跡第20次調査

## ――小路市場の下に眠る弥生時代――

平成８年７月16日
神戸市教育委員会

### はじめに

平成８年４月22日から開始した本山遺跡第20次調査では、これまでに弥生時代前期から中期にかけての遺構（当時の人々が地面に残した生活の痕跡）と遺物（当時の人々が使った物）が多数見つかりました。本日は調査地の東半部分で見つかっている遺構と、これまでに出土した遺物の一部をご覧いただきます。




本山遺跡　これまでの調査地（小路市場周辺）　S＝1：3000

## 弥生時代の遺構

### 流路（りゅうろ）

弥生時代の村の中を流れていた小川です。この流路が弥生時代中期に埋まりますが、その時たくさんの土器などの遺物が流れてきて埋まりました。西半の調査地では流路の岸から多くの遺物がでてきており、川岸から壊れた土器などのゴミを捨てたのかもしれません。

### 柱穴（ちゅうけつ）

直径10～30cmぐらいの丸い穴がたくさん開いていますが、これ柱穴です。これらの柱穴は読んで字の如く、**掘立柱建物**や**高床式建物**や**柵**などの柱の穴と考えられますが、どの穴とどの穴が繋がって建物となるのかは、いまのところ明らかではありません。

### 貯蔵穴（ちょぞうけつ）

直径約１ｍで円筒形をした穴が数カ所ありますが、これが**貯蔵穴**です。また幅約１ｍの長細い穴も貯蔵穴と考えられます。これらの穴には食物などを保管していました。貯蔵穴本来の使用がされなくなった後はゴミ捨て場となり、食べて捨てた獣の骨などが出土しています。

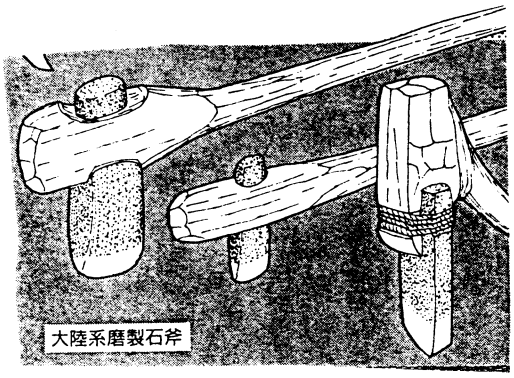
## 弥生時代の遺物

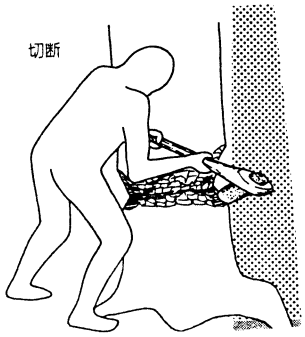
### 土器

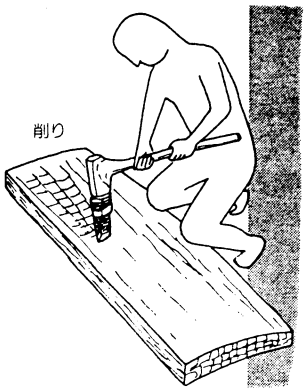
**壺**や**甕**などの弥生土器が多数みつかりました。甕は煮たきに使う調理具で、壺は水や食物を貯える貯蔵用の器です。

### 石器

弥生時代にはすでに鉄などの金属はありましたが、まだまだ数は少なく貴重なものでした。ですから、現在では金属が使われている刃物類は、ほとんど石でつくられていました。その石材はサヌカイトと呼ばれる奈良県と大阪府の境にある二上山付近や香川県の屋島付近で採れる石などを使っていました。今回出土した石器としては、稲穂を刈る**石包丁**（いしぼうちょう）、木を切ったり削ったりする**石斧**（せきふ）、矢の先につける**石鏃**（せきぞく）、穴を開ける**石錐**（せきすい）などがあります。



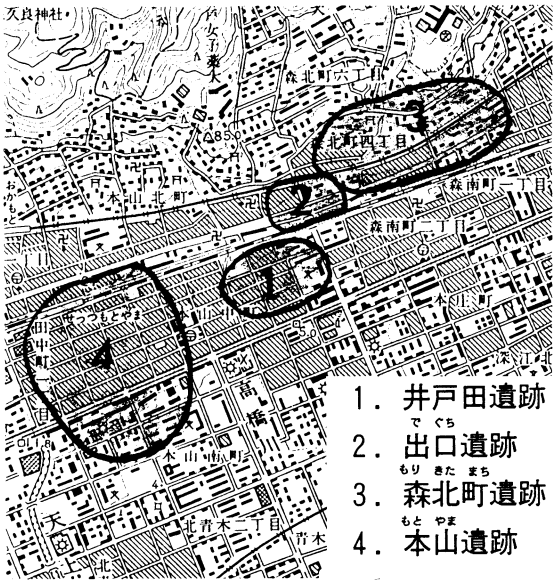



# ☆本山第三小学校内（井戸田遺跡）で

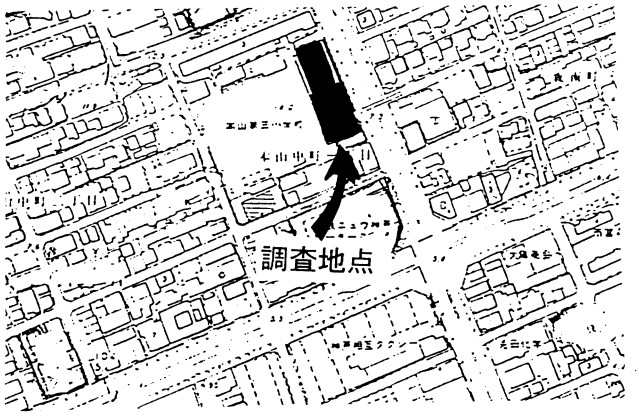
# 弥生時代の水田跡を発見！

今回、本山第三小学校の校舎の建て替え工事に伴い発掘調査を行いましたところ、弥生時代後期の水田跡が確認されました。　（約1,700 年前）



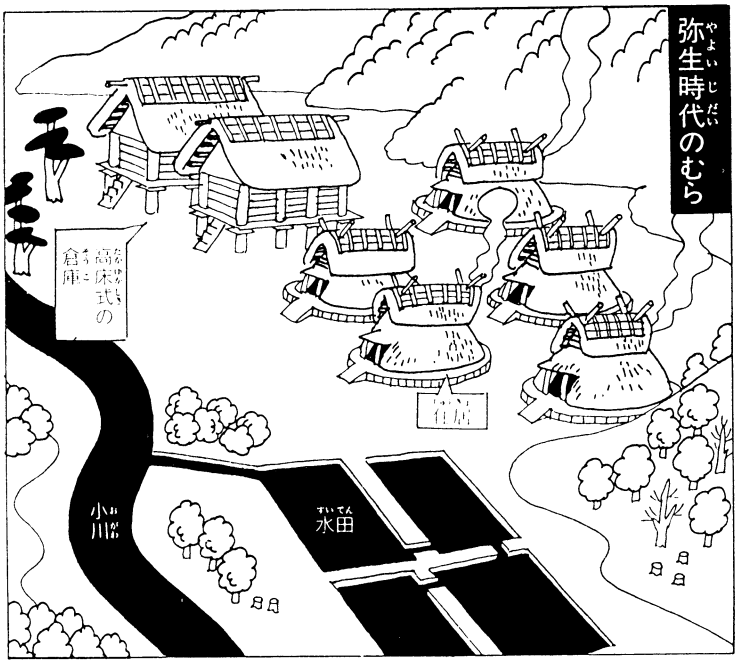

井戸田遺跡とその周辺の遺跡

（S＝1：25,000）




調査地位置図（S＝1：5,000）

発見された水田跡は、洪水による土砂で覆われていました。その土砂の中から当時の人々が使っていたと思われる土器の破片が数多く見つかったことから、近くに集落があったと考えられます。




くもん出版『日本の歴史①』より

当時の井戸田遺跡はきっとこのような風景だったのでしょう。

平成８年７月17日

神戸市教育委員会文化財課

# ・兵庫区大開遺跡の調査

教育委員会文化財課

大開遺跡は、市立兵庫大開小学校（兵庫区大開通４丁目）の校舎新築工事に伴って発掘調査されました。

調査の結果、縄文時代晩期（今から約3000年前）・弥生時代前期（今から約2300年前）・平安時代後期～室町時代（今から約900年前～600年前）・江戸時代末頃（今から約200年前）の４時期の生活の痕跡が確認されました。

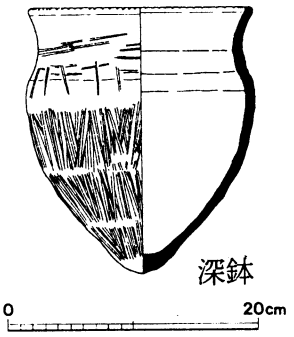
弥生時代前期の調査では、竪穴住居跡３～４棟で構成されたムラのまわりに溝を巡らした環濠集落（当初は直径約40m、後に拡張し長径80m・短径約40m）が調査され、当時の大開ムラの様子を詳しく知ることができました。竪穴住居跡のそばには食料用と考えられる貯蔵穴（計11基）があり、溝の外側には墓地があったようです。また、出土遺物は、近畿地方が縄文時代から弥生時代へ移り変わっていく段階の資料としても、注目されているものです。

今回展示している遺物は、弥生時代前期の遺物を中心にして展示しています。弥生時代前期は、近畿地方で初めて人々が水田を作り本格的な稲作を始めた頃で、現在の日本の基礎が作られた時代ともいえる時代です。兵庫の人々が、お米を作り始めた頃への思いを馳せ、古代への理解を深めていただければ幸いです。

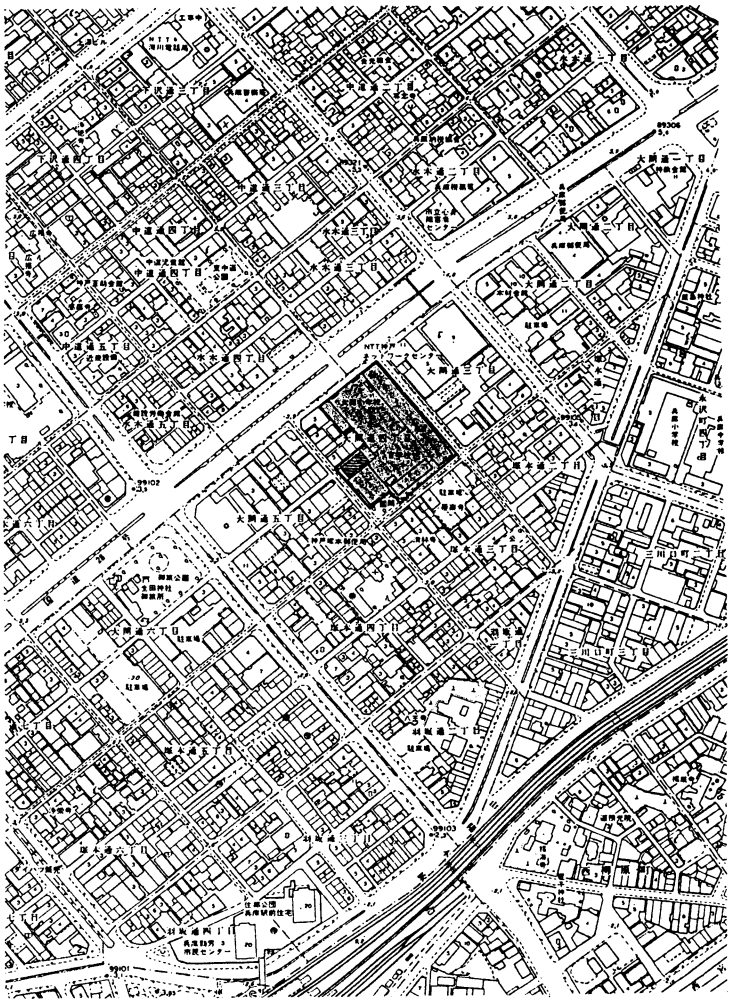
○縄文時代晩期の土器

縄文時代は狩猟・採集活動が中心の時代で、大開遺跡でも鹿や猪の歯などの動物の骨が出土しています。このような動物の肉や木の実を煮炊きした土器が深鉢と呼ばれる土器です。

この時代には、他に浅鉢と呼ばれる食べ物などを盛りつけるための土器もありますが、大開遺跡では破片でしか出土していません。




○縄文時代晩期の土器



大開遺跡調査地位置図

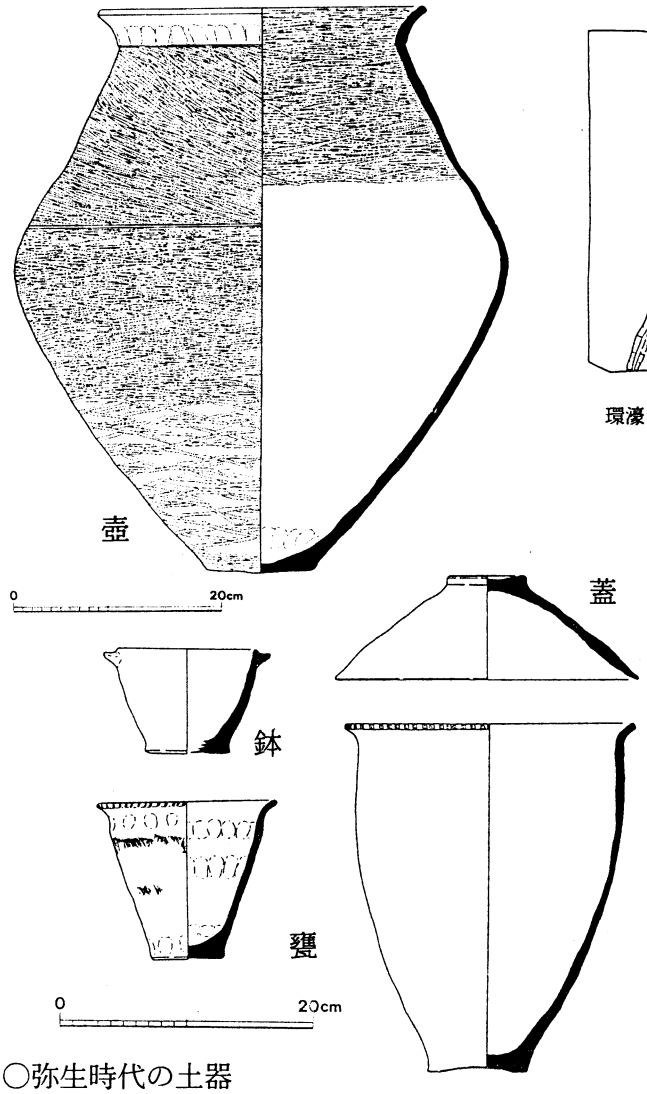
○弥生時代の土器

弥生時代の土器には、壺・甕・鉢・蓋・高坏などの土器の形がありますが、近畿地方では弥生時代の初めには高坏はほとんど見られません。

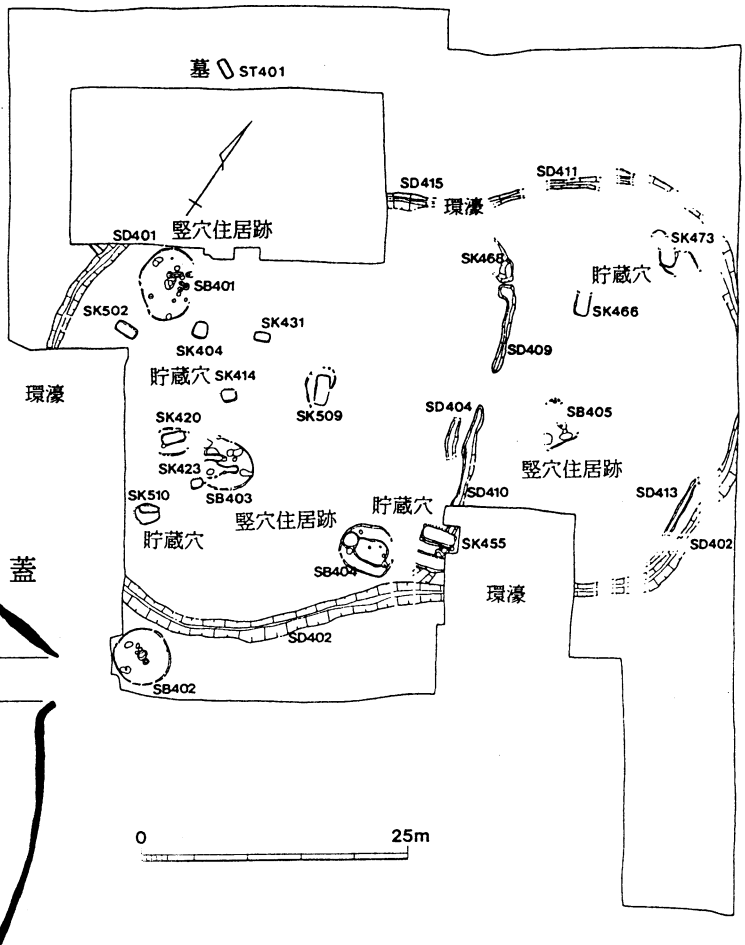
米作りが本格的に始まる弥生時代になると、縄文時代にはあまり見られなかった壺が多く作られるようになります。これは採れたお米などを蓄えることが大きな目的であったものと考えられています。

甕は、縄文時代に深鉢と呼ばれていたものと同様の使われ方をするものですが、弥生時代にはお米を炊くということが新たに加わります。そして同時に、土製の蓋がセットとして使用されるようになります。そうして作られた食べ物をなどを盛りつけるため、甕の小型品のような鉢が使われるようになります。

弥生時代は米作りが生活の主体となっていきますが、縄文時代から引き続き狩猟・採集活動も行われ、それを裏付けるものが多量の石製の鏃です。大開遺跡では300本近くの鏃が出土しています。他に石包丁などの石器などに穴をあけるための、石製の錐も多く出土しています。




○弥生時代の土器




弥生時代前期環濠集落平面図

・兵庫図書館『大開遺跡展』資料

・平成８年１０月

# 都賀遺跡展　1996年11月8日（金）～11月10日（日）　都文化会館

都賀遺跡は、六甲山南麓を流れる都賀川の東岸に位置しており、標高約40m前後の扇状地上に立地しています。現在のところ、遺跡の範囲としては、神戸市灘区神前町2丁目～4丁目周辺に所在しており、東西約0.3km、南北約0.2kmと考えられます。

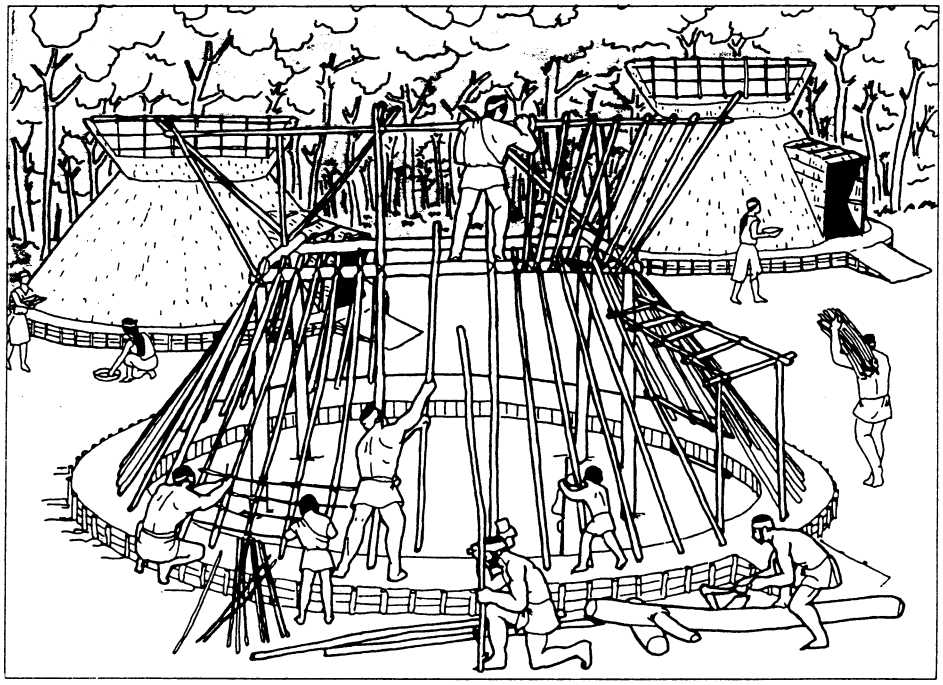
昭和62年9月に、都賀地区住宅改良事業に先立ち、神戸市教育委員会が、試掘調査を行ったところ、遺跡の存在が明らかになりました。昭和63年2月～3月に、妙見山遺跡調査会が、仮設住宅建設予定地の 160㎡について、発掘調査を実施しました（第1次調査）。調査の結果、弥生時代中期中頃（今から約 2,000年頃）の『方形周溝墓』と呼ばれる周囲に溝をめぐらしたお墓や土器等を捨てた土坑と呼ばれるゴミ捨て場が見つかっています。

また、平成元年6月～10月に、妙見山遺跡調査会が、住宅建設予定地の 410㎡について、発掘調査を実施しました（第2次調査）。調査の結果、弥生時代中期中頃（今から約 2,000年頃）の『方形周溝墓』をはじめ、弥生時代後期～古墳時代前期頃（今から約 1,800年～ 1,600年前頃）の竪穴住居や奈良時代～鎌倉時代頃（今から約 1,300年～ 800年前頃）の掘立柱建物が見つかっています。

その後、神戸市教育委員会が、平成4年から平成7年まで、市営住宅建設事業に伴い、6次にわたる発掘調査を実施してきました。現在も、平成8年4月から、市営住宅建設事業に伴い、発掘調査を実施しています（第7次調査）。今回の調査では、縄文時代早期頃（今から約 8,000年前頃）の押型紋土器・石器をはじめ、弥生時代中期頃（今から約 2,000年頃）の溝や土器、古墳時代前期頃（今から約 1,600年前頃）の竪穴住居、鎌倉時代～室町時代頃（今から約 800年～ 600年前頃）の柱穴や土坑等が見つかっています。

これまでに実施した都賀遺跡の発掘調査では、縄文時代早期頃（今から約 8,000年前頃）から江戸時代頃（今から約 300年～ 400年前頃）の土器・石器・陶磁器等が、たくさん出土しています。

今回の展示では、出土した遺物の中から、代表的なものを数点選びだして、展示しています。



弥生時代の家作り

『古代史復元・第4巻』より転載

| 時代 | | 今から何年前 | 都賀遺跡の歴史 | 日本の歴史 |
|---|---|---|---|---|
| 先土器時代 | | 約10,000年前 | | 石器で狩りをする。 |
| 縄文時代 | 草創期 | | | 土器作りがはじまる。 |
| | 早期 | 約 8,000年前 | 都賀遺跡に人が住み始め、押型紋土器や石鏃が作られる。 | |
| | 前期 | | | |
| | 中期 | | | |
| | 後期 | | | |
| | 晩期 | 約 2,300年前 | | 米作りと金属器が大陸から伝わる。 |
| 弥生時代 | 前期 | | | |
| | 中期 | 約 2,000年前 | 方形周溝墓が造られる。 | |
| | 後期 | 約 1,700年前 | 竪穴住居が造られる。 | 邪馬台国の女王卑弥呼が魏に使いをおくる。 |
| 古墳時代 | 前期 | | | |
| | 中期 | | | 古墳が盛んに造られる。 |
| | 後期 | 約 1,400年前 | | 仏教が伝わる。 |
| 飛鳥・白鳳時代 | | 約 1,300年前 | | 大化の改新が行われる。 |
| 奈良時代 | | 約 1,200年前 | 掘立柱建物が造られる。 | 奈良に都を定める。<br>京都に都を移す。 |
| 平安時代 | | 約 800年前 | | 鎌倉幕府が開かれる。 |
| 鎌倉時代 | | 約 700年前 | | 室町幕府が開かれる。 |
| 室町時代 | | 約 500年前 | | |
| 安土・桃山時代 | | 約 400年前 | | 豊臣秀吉が全国を統一。<br>江戸幕府が開かれる。 |
| 江戸時代 | | 約 200年前 | 溝や井戸が掘られる。 | 鎖国が完成する。 |
| 明治時代 | | 約 100年前 | 木造瓦葺きの家が建つ。 | 明治維新 |
| 大正時代 | | | | |
| 昭和時代 | | | | |
| 現代 | | | 市営住宅建設工事が始まる | |

# 都賀遺跡の歴史年表

# 櫨谷町の原始・古代遺跡

櫨谷は丘陵に挟まれた狭小な谷ですが、その丘陵上や平地には現在26ヶ所の遺跡が知られています。それらのほとんどは、西神ニュータウンの建設や、圃場整備などに先立って行った発掘調査によって、明らかになってきました。

最も古い遺物が確認されているのは青谷遺跡で、約１万年ほど前の石器が知られています。しかし、その後人々が生活した痕跡は確認されていません。

今から2300年ほど前、日本列島に米を作る技術が伝えられました。弥生時代の始まりです。そのころ明石川下流域では吉田遺跡や新方遺跡など、幾つかの集落が誕生しました。それが櫨谷などの上流域に波及してくるのは少し遅れ、2000年ほど前になります。ただ青谷遺跡では、少しですが弥生時代始めころの土器が採取されています。

弥生時代の後半には、西神ニュータウン内第65地点遺跡や青谷遺跡、最近発見された城ケ谷遺跡のように、米作りには不便な丘陵上に集落がつくられます。このような現象が起こるのは、「戦い」があったためと考えられています。伊川や明石川本流域の丘陵上でも同様の集落が多く知られています。

弥生時代に誕生した集落が、その後の古墳時代にまで続いて人々が住んでいることが確認できるのは、栃木遺跡だけです。松本・菅野・池谷・福谷など、多くの集落が再び誕生するのは、古墳時代の終わりころ、今から1400年ほど前です。そのころ、集落の有力者は土を盛り上げてお墓を造りました。それを古墳と呼んでいますが、松本や池谷などの丘陵上に数多く造られています。

奈良・平安時代の集落の詳細は、櫨谷ではまだよくわかっていませんが、城ケ谷遺跡では火葬墓が見つかっています。鎌倉時代になると、水田開発が活発になったようで、現在の水田の下には、ほとんどの所でそのころの水田が見つかります。また、あちこちで建物の跡が出土しています。

如意寺はかつて24坊を擁した大寺院でした。最近の発掘調査では平安時代末の瓦が出土し、その創建年代を示すものではないかと考えられています。

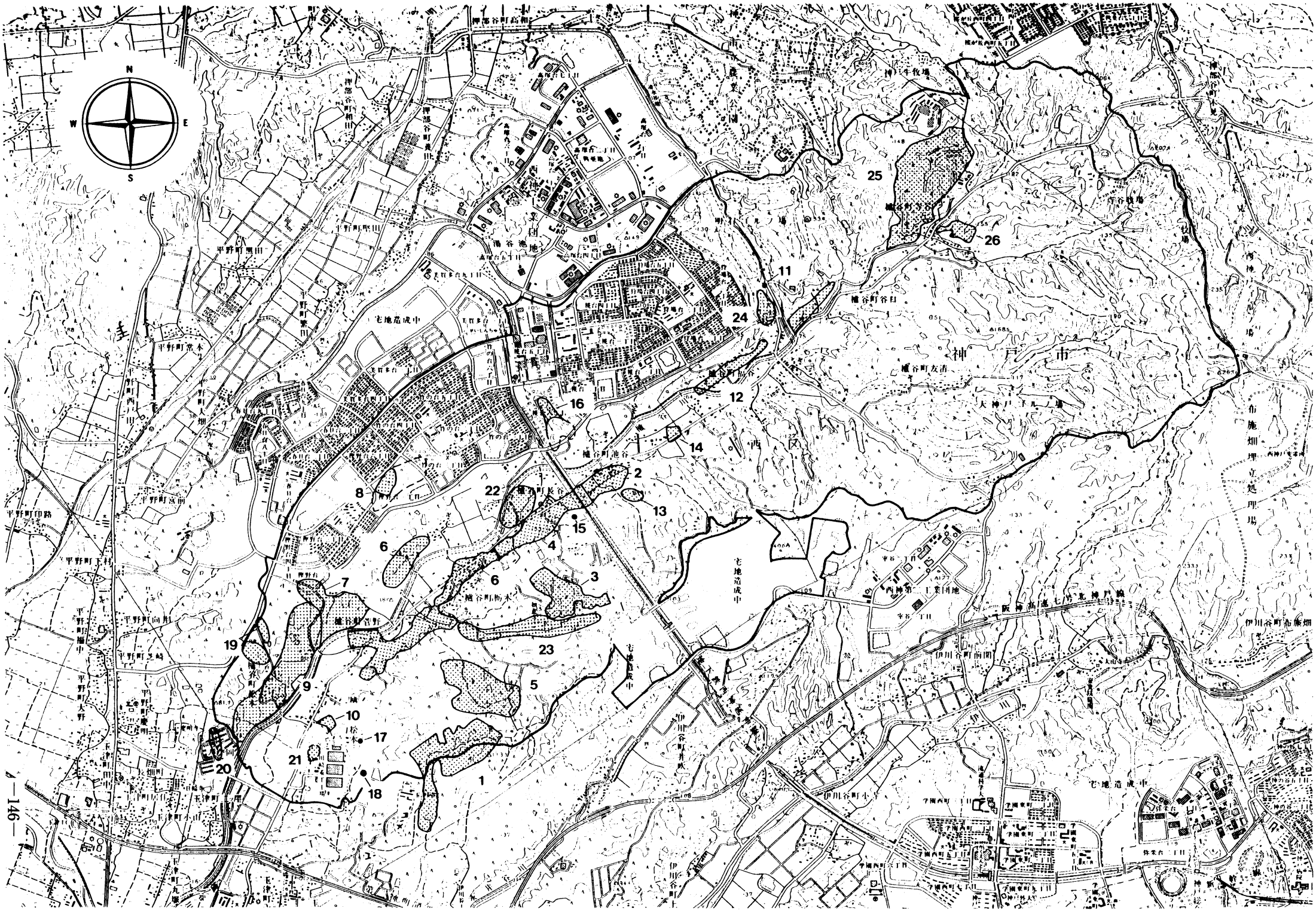
櫨谷の歴史は徐々に明らかになってきています。今後も発掘調査によって、様々な事が判明してくることと思います。

神戸市教育委員会文化財課

# 櫨谷町の遺跡とその消長

1997年２月末現在

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 0年 | 400年 | 800年 | 1000年 | 1200年 | 1400年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 弥生 | 古墳 | 奈良 | 平安 | 鎌倉 | 室町 |
| 1 | 青谷 | 櫨谷町　松本・菅野 | | | | | | |
| 2 | 櫨谷中学校 | 〃　池谷 | | | | | | |
| 3 | 如意寺裏山 | 〃　谷口 | | | | | | |
| 4 | 長谷 | 〃　長谷 | | | | | | |
| 5 | 城ケ谷 | 〃　菅野・谷口 | | | | | | |
| 6 | 栃木 | 〃　栃木・松本 | | | | | | |
| 7 | 西神N.T.No.62 | 〃　菅野 | | | | | | |
| 8 | 西神N.T.No.65 | 樫野台 | | | | | | |
| 9 | 菅野 | 櫨谷町　菅野・松本 | | | | | | |
| 10 | 松本 | 〃　松本 | | | | | | |
| 11 | 西神N.T.No.85 | 〃　福谷 | | | | | | |
| 12 | 福谷 | 〃　福谷 | | | | | | |
| 13 | 池谷群集墳 | 〃　池谷 | | | | | | |
| 14 | 池谷 | 〃　池谷・福谷 | | | | | | |
| 15 | 光松古墳 | 〃　長谷 | | | | | | |
| 16 | 西神N.T.No.66 ～No.77 | 〃　長谷 | | | | | | |
| 17 | 九尾谷古墳 | 〃　松本 | | | | | | |
| 18 | 松本古墳 | 〃　松本 | | | | | | |
| 19 | 塚本群集墳 | 〃　松本 | | | | | | |
| 20 | 西の谷群集墳 | 〃　松本 | | | | | | |
| 21 | 川重裏山 | 〃　松本 | | | | | | |
| 22 | 櫨谷中 | 〃　長谷 | | | | | | |
| 23 | 如意寺 | 〃　谷口 | | | | | | |
| 24 | 西神N.T.No.84 | 〃　福谷 | | | | | | |
| 25 | 衣笠城 | 〃　寺谷 | | | | | | |
| 26 | No.206　地点 | 〃　寺谷 | | | | | | |


N
W
E
S
神戸市
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

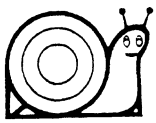
**平成５～８年度　神戸市遺跡現地説明会資料集**

平成12年３月　印刷
平成12年３月　発行

発　行　　神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町６丁目５－１
☎　０７８－３２２－５７９８

印　刷　　㈲　アロエ印刷
神戸市中央区中町通２丁目３－８
☎　０７８－３７１－３８３１

神戸市広報印刷物登録・平成11年度　第346号（広報印刷物規格　Ａ－１類）



本書は、再生紙を使用しています。